

---

# 魔王様みーつ人外

瑞珂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王様みーつ人外

### 【NZコード】

N7150P

### 【作者名】

瑞珂

### 【あらすじ】

異世界トリップ（魔王ver）って、人外な美人達に遭遇するのが普通だと思うんです。…一応この状況、人外な方々に囲まれてます。ええ、文字通り『人外』です。

## 序章 魔王様の呪き

ある世界では、天使と悪魔が敵対している。

また別の世界では、翼族と地族が敵対している。

これは、それまた別の世界の話。

異世界トリップ。

それは、夢見る年ごろの者ならば誰でも心躍るフレーズではないか。その先に待ち構えている物を考えず、目先の『ファンタジー』に焦点を当てれば、一度いいから経験してみたいものだろう。……危険がなければ。

正義の味方なる、勇者。

これに憧れるものも多いのではないか。

普段の世界では普通の人だつたけど、異世界に行つたら『俺つえええ！』なテンションで、武術に魔術もろもろオールオッケーでウハウハ・美形ハーレムなぞ作れるものなら、諸手を挙げていきたくなるのが、普通の人間である。

一握りの者は、魔王に憧れるだろ？

怜悧ともれる美貌・深淵をのぞくような黒。

これに痺れるものもいるだろ？

魔族は美形が多いとも聞くので、そんな彼らに傳かれるのも悪くないと考えるのは致し方ない。

しかし、トリップ補正ならぬ向こうと同じ姿をした人間が、超絶美形ども（人外）に傳かれるのは、精神衛生上とてつもなく悪い。  
：いや、だからこそウハウハなのか？

さて、皆さんに報告しよう。

私、瀬戸悠は異世界トリップして、魔王になりました。

ただし美形はいません。

いるのは人型ではない魔物たちです。

## 序章 魔王様の呪文（後書き）

見切り発車！

多分ギャグになります。

ときたまシリアルス……？

## 魔王様の回顧めもりー 1 (前書き)

魔王様は女の子です。

ちなみに、「はるか」と読みます。が、魔物さんたちには「ゴウ」と呼んで貢います。

理由は後ほど！

## 魔王様の回顧めもりー 1

「こちらの世界に来た時の事。

その時、私は高校生でした。  
中学の時は真面目一直線でしたので、どうしてもサボりをしてみたかったのですよ。

素敵なロマン！高校生だからこそその価値があるってもんです。多分、  
健康なのに、保健室のベッドを利用する  
ずっとやってみたかったのですよ。  
てわけで、イキイキと保健室に入室しようとした。

するとボールが一つ飛んできて、同時に両方あたり…………今考える  
と、悪意しか感じられませんね。

そして田を開けたら、森の中でした。

なんてことがあるわけない。

実際は、田を開けたら水中でした、だ。

詳しく述べると、私が水中。つまり私の異世界トリップの  
最初では、溺れかけてた…というか溺れたのです。

「ここには異世界。着地点で大事だと思つ

普通、異世界トリップしたら神殿とか森の中だと思います。  
しかし…水中。足すらつかないってどういう事でしょう?  
ちなみに私、泳げないんですけどね。

息継ぎが出来ないので、バタ足で行ける所まで泳ぎましょう。

溺死つて、一番苦しいそなので、マジで遠慮したいから  
死力を尽くして泳ぐ!

つーかさ、溺死が嫌だから海とか川から離れたところに居を構えた  
のに、何故溺れにやならんのか畜生!

この状況に陥らせた原因の奴マジで殴る!

肉体のみならず精神も攻撃してやる!

『心をヤスリで抉るようだ』と、友人に言わしめた私の嫌味をおみ  
まいしてあげようかねえええぐぶふおおおお!!!

「…アンタ、大丈夫か?！」

いきなりザツパーンと体が浮き上がった。

ここにちは空気。〇₂大好きだよ。

人間で陸上生物だよね。ああ、空気がおいしい大気圏万歳!

あーもーさっきから水滴が流れてるよ。

さっきまでいた水か涙か判らない。

が、とりあえず空気愛してる。

「おーい」

「…はいっ？！」

なんだか「ひ」した誰だ。

いきなり声が聞こえたので声が裏返つた。  
声のする方を見るが、いない。

下を見ると、木のボートだ。  
誰かが載せてくれたらしい。

「えーと、大丈夫か？」

「？……もしかして、助けてくれた？」

「一応。溺れてたみたいだし」

姿の見えぬ者との会話。

シャイなのか？

声の感じからして、若い男の子の声だから純情ボーイなかもしない。

どうひいてる、

「助けて頂きありがとうございます。」

しかし…顔を見せてもらわないと、お礼が言えないんすけど……」

純情なのは判つたから、お姉さんに顔を見せてくれよ。

異世界＝美形わんさか

つていう公式の成り立つている私に、顔を――――――。



## 魔王様の回顧めもりー 1（後書き）

ははは。終わるかなあ？

お気に入りありがとうございます！  
とても嬉しいです…はう

部下泣かせの魔王様は回顧めもつーを語つまゆ（前書き）

放置しきれりでしたね  
読みづらくてすみません

## 部下泣かせの魔王様は回顧めもりーを語ります

「そして今に至る…と」

「待つて！はしょりすぎだから何が何だか分かんないっていうか泳げなかつたんだね魔王様！」

ノンブレスもとい、一息で突っ込みを入れる部下テディ＝ベアに、称賛の拍手を送るのはこれまた部下のナディアス＝キーファ。

今、くまのぬいぐるみを想像した人、ある意味大正解。ナディアス（通称ナディ）がクマのぬいぐるみの姿をしていて、テディ＝ベアがゲル状…げふん、スライムです。

……嘘です。ちゃんとぬいぐるみがテディ＝ベアで、スライムがナディです。すみません、調子に乗りました。ちなみに一方ともです。

スライムなのに拍手が出来るのか、と思う貴方、何故か出来るんです。ゼリーとゼリーが勢いをつけてぶつかることにより、空気抵

抗の関係で……『ごめんわかんない。なんかそんなことをアリちゃんが言つてました。あ、アリちゃんて言つのは、ピンク色の蛇さんです。

最初に会つた瞬間、思わず腰を上げてしまつた私は悪くないと思う。

だつて大蛇なのだ、アリーちゃんは。

想像してほしい。パルテノン神殿の支柱ほどもある太さの胴体をもつ大蛇を……しかもピンクなのだ。ショッキングピンク！――――

怖いでしょ？絶対怖いよね？そつだと言つてよおおおおおお――！――！

これをクマ（テディ＝ベアの愛称。英語の大嫌いな私がティなんて巻き舌出来ないのさ、はつはーん！それに、本人に『奇妙な発音で名前を呼ばれるなら、屈辱な呼び名でもかまわない』と言わされたらそう呼ぶしかないでしょー。……そこまでひどかつたか私の発音）に言つたら、頭をはたかれて「何言つてやがんだあんた！」と怒られました。ひどい。

そして「ぬいぐるみのくせに」と呴いた私に、さらに一発食らわせてくれやがりました。

いや、私が悪いのはわかつてゐるだけさ、一応私、権力者とうか王様ね。『魔王』とか呼ばれる存在なのに、部下に暴力振るわ

れるとか何事よ。

しかも見た目ぬいぐるみなのに、じぶしが固いというか…うん、見た目にやぐわぬ重いパンチ。

ぬいぐるみに虜められている私を見て、ナディアが半透明の体をフルンと揺らしながら、思案気な色をした。『考へ中』といつテロップが体表を駆け巡る。いやマジで。

気になつたので声をかけると、ナディアは何とも言えない顔で私は質問した。

「魔王様、私の姿はどう見えますか？」

「え、うつすら紫色のスライムじゃないの？」

「え」

はもるなそ」。疎外感を感じるじゃないか。……いや、見た目からして疎外されてるが。

「いやいやいや、種族の問題じゃなくてですね、ナディアースの見た目を……」

「いや、だからスライムでしょ。…今は少し黄色っぽくなつてるので」

クマが、「まじかよ」とつぶやいた。なんだどうした。

「えーっと、魔王様？ テーデイの外見とかも教えてください」「くまのぬいぐるみのティーデイベア。田の色は紺色で、銀に近い色の毛。」

ナディイが「ええええええ」とつぶやいた。なんだどうした。

「つてまさか魔王様、だから俺のこと『クマ』つて？…」「それ以外何がある」「名前からじゃなかつたのか？！」「それも含めてだけ？」

クマがようよると後ずさつた。

『マジありえねえよ。この人もうやだほんと』とか、ぶつぶつ咳いている。しかしその姿は愛らしく。

「ハハハハハハハハだよ。もう何これ意味わかんない。いい加減仲間外れにしないで。魔王様さみしい。」

「なあテーデイ、私はまだ魔王様に種族を言つてなかつたんだ……」「つーことはつまり、アレか」「ええ、確実にアレです。まさか本当にこるとは思わなかつたとうか、ここまでイレギュラーじゃなくてもいにいといふか……」「もうやだこの魔王」

しつづくと泣き始める一人。  
うん、すごく貶されてるよね。

とりあえず私にわかるように説明しり

ヒーリングがあつたなあ、と思ふ返した。

回想が長くて申し訳ない。

まあ、簡単に今の状況を説明すると、異世界トリップして溺れかけた私がいつの間にか魔王になつてたんです。

それで、私はものすごく不条理な存在ぢしくて、『マジ勘弁してください』と部下に泣かれました。

…普通やこは崇め奉るヒーリング。魔王なんだし。

え、偏見？

いえいえ、この世界は実力社会なのです。

部下泣かせの魔王様は回顧めもりーを語ります（後書き）

主人公が自由人過ぎて、筆者泣かせです。

部下も泣かす主人公……。うん、それは不可抗力だけどね

**魔王様の呪いは偏見ですよね（前書き）**

魔王様の愚痴です。

彼女は美形観察が好きなんです。

美形＝観賞用です。

## 魔王様の眩きは偏見ですね

「魔王殿、今日もお美しい」

はいはいはい、私の外見は平々凡々ですから

「本日も魔王様のご威光が輝かんばかりです」

お前の頭も輝かんばかりだよ

ただ今、國の中核を担つてゐる大臣どもの息子供に言い寄られてます。

もちろん人外な方々ですが何か？

ほんとさ、いい加減人型の魔族に会わせてくれないかな。

二足歩行のトカゲとか、頭ライオンで下半身は鳥人とかはもう見飽きました。

人型プリーズ。

異世界つて、美形のオンパレードじゃないの？

いや、わかってるよ。美醜の基準なんて一定ではないことくらい。

しかし、そこは異世界補正で私基準とかにならんのか？！  
こつち基準の美形でもさ、人型でなければ意味ないよね？

ああ、本当に……私のつるおいは何処

！！

あ、そういうえば上級貴族になるにつれて随、美声度が上昇してるん  
だけど、これって何かね。

『きやつ、やだ美声（はあと）』とか思つて振り向いたら、人間じ  
やないの。

……ええ、文字通り人外さんですが何か？

異世界の醍醐味・美形観察のできない私つて何かしら……。  
部下の皆は、私のせいなんだつて。つまり自業自得？らしい。  
私何もやってないのに…………

てわけで随さん！！

もし貴女が異世界へ行つて、美形に遭遇したら喜びましょう！……  
神へ感謝、つてやつです。

……もし、私のように美形に遭遇できなかつたお嬢さんがいたら、  
同盟組みませんか？

その名も、「召喚者ぼこつ隊」同盟です。



## 魔王様の弦のは偏見ですよね（後書き）

今回の魔王様は、美形不足により若干壊れています。あらー。いやね、登場人物は魔王様を除いて皆、……おっといけない。ネタバレするところだった。

**地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です（前書き）**

今回は前半説明です。

後半から「メモディー」入ってます。

不完全燃焼。

「ミ」の分別大事。絶対。：あれ？

## 地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です

今日も今日とて、数冊の本を確保し私は机に向かっていました。何をしているのかといつと、この世界についてのお勉強です。

本来なら私は執務をしなければならないんだけど、この世界にきて日が浅いので宰相とかが筆頭となつて『魔王代理』としてこなしてくれています。すぐ申し訳ないから、はやくこの世界を理解できるように頑張ろうと思つたのが、この勉強タイム……自学自習です。

魔王というものは『世界を理解する』ことを、強制的にやつてはいけないみたい。『強制的』っていうのは、誰かが魔王に教師役となつて付きっ切りで教えること。もちろん、『頼む』という形ならOKなんだけど、なるべく自主的に学ぶことが大切なんだって。

人に言われてやる、ていうのは国民に失礼だし、人の上に立つ者の態度でもない。それに人に教わるつてことは、教える側の思想をもとに治世するつてことになる。もしその人の考えが偏見じみていたり、ある角度からしか物事を判断できなかつたら、国が滅ぶきっかけになつてしまふ。

その手のことが過去何回もあつたから、それを防ぐために多少大変でも、色々な角度から自己で学ぶ　　というのがこの国の魔王になる者が辿る過程。

それは確かに正論なんだけど、私はこの世界に来て日が浅いのが特例として教師役がいるの。一応、これらの考え方のもと知識や思想が偏らないように数人で、つていう形をとつてます。

ゼロから全てを教えてもらつのでなく、予習をしてから授業をす

るつていうスタイルをとつてるので、一応生物学と判断されているみたい。

でもね、はつきり言って私が魔王になつたのは不可抗力なの。なりたくてなつたわけでもないのに、眞面目に魔王として学んでいるつておかしいよね。

……と言いたいんだけど、それには理由がある。私の選択は、損得勘定でいつたら損だけど許容できる範囲の損だから、今の地位にいるのが私の現状。

確かに就任は脅されたりもしたけど、彼らの話を詳しく聞くとそれは仕方がないかなと思える。なにより私を含めた多くの生命の危機つてことも含めると、なにがなんを得ないうつていうか……。

まあ、そんなこんなで魔王就任を了承したのです。詳しい説明は、今度でも。

そして私が自主勉強していると、訪問者が訪れました。

「ハーア魔王様、『機嫌いかが?』

「あれ、アリーちゃん?」

初めてアリーちゃんに会つたときは思わず固まつてしまつた私だが、今となつては普通に対応できます。

余談だが、その時にアリーちゃんの息をのむほどに美しさで固まつたと思つたらしい。

いやいやいや、食われると思って固まつたんですけどね？！  
ちなみにとても『姉さん』と呼びたくなるお姉様キャラです。この方に逆らつたら明日は拜めなくなると、信憑性の高い噂まであります。キヤー素敵。こんなお姉様に痺れます。

アリーちゃんも城で働いてるんだけど、ちょっと特殊です。

女性でかなりの実力者だから国の部隊長の一人で、今は王直属の護衛の一人でもあります。私が女なので、一人でも同性がいると安心できる、つて意味も含まれてるみたい。

そんなわけでアリーちゃんと交流することが増え、甘いもの好き同士っていうこともあります、仲は良好です。

「あら、今日は地理について？」  
「うん」

今日の範囲は地理。

この世界には大陸が6つあって、それぞれの大陸に大まかな種族でわかれています。

世界地図には、魔族が住んでいる大陸（ナーダミシャス大陸  
魔大陸ともいう）が中心となつて、魔大陸を囲むように四隅に人族の住んでいる大陸が配置されます。

人族と魔族はお互い不干涉のスタンスをとつて、一切交流がないんだつて。交流があるから、争いが生まれる……と判断した昔の人族と魔族の王様たちが条約を結んだみたい。

それで魔大陸には国が五つあって、我が国は『月竜国』と呼ばれてます。

ほかに『炎竜国』『水竜国』『土竜国』『樹竜国』があります。

何故国名に『竜』がついているのかというと、「強そう」だからだそうな。そんな理由かよ、とツッコミを入れたのはよく覚えてます。

確かにすべての国に竜族が住んでいるけど、他の種族と比べて数が少ない。もともと出産率が悪いといつものもあるけど、誘拐（召喚）されて数が少なくなっているのも理由の一つみたい。

ほうつておけばその内帰つてくるから、特に騒いでなかつた竜族だけ、つっここの間「卵」まで浚わたんだつて。流石にやりすぎとこうか、限度を知らないことに竜族の方々はかなりご立腹したようで、皆さんでものすごい防御魔法をかけてました。多分これで竜族の人口（竜口？）が減ることは無くなりそうです。まあ、国として働き手が少なくなるのを防げたのでこちらとしても利点です。わー。ぱちぱち。

炎竜国は良い武器の名産地。それに伴い、武術も発展しています。水竜国では魔術が発展してるの。だから魔法を伴う医術が発展してるかな。

土竜国は鉱石や魔石がよく採掘されます。だから、装飾品とか手工業が発展します。

樹竜国は国土の8割が森なの。だから森とうまく付き合える種族（エルフ・妖精とか）が多く住んでます。薬の医学が発展します。

最後に、我が国『月竜国』では、占星術が有名。貴重な蔵書とかある図書館とかあるから、学者が多く訪れる国です。あと、うちでも魔石が採れます。土国よりは産出量は少ないけど、質が高いから

結構好評みたい。

「ここまでが今日の勉強の範囲。

「ねえアリーちゃん、何でづかの代表的な名物は占星術なの？普通、図書館じゃないの？」

普通、貴重な蔵書とかあって学者が沢山来るとこなら、図書館を名物にするはずだ。しかし、この国では何故か占いを名物にしている。それも占星術だ。

確かに、この国の夜は晴れていることが多い。しかし毎日晴れるわけでもないので、星を使つた占いが必ず出来るものでもない。占星術のみを推しているのが不思議だった私は、アリーちゃんに質問する。

「何でつて…月竜の特性だからよ」

「は？」

尻尾をぐるぐると器用に回し、アリーちゃんは私の問いに答える。

「月竜は占いが得意なの。昔に月竜から占いのやり方を教えてもらったから、我が国ではそれを前面に推してゐる。それで、占星術は月竜以外でも簡単に占えるから、これが一番有名な理由。」

「え、ちょっと待つて。『月竜』？」

「ええ。我が国は『月竜国』と呼ばれてゐるのは、それが一番の理由。

実は正式な国名は『月竜国』じゃないのよね。昔のある時代の魔王様が月竜ファン……いや、占星術に感激したんだつけ。そんな感じで国名を変えちゃったの。」

他の国もそんなノリで国名を変えひやつたのよね~あはは

なんだそのぶつちやけ話。

え、嘘だんそんなノリでいいの?

「あ、反対意見とかは全く出なかつたやうなよ。」

あ、そりですか。

……。

……。

「あ、勉強会に行くか。」

無言になつて支度を始めた私に、鎌首をもたげて不思議そうに尻尾

さくねくねさせゐアリーちゃんがいた。

地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です（後書き）

説明ばかりです。

テ「ティがいなきやいじりキャラがいなくてつまらんー・

（魔王様の日記）

○月 日

アリーちゃんが薄桃色になつてました。

ショックングピンクよりも似合つていたと思います。

ナティが、いろんな女性に熱い視線を送られてこる」とに眞付いた。

もちろん男性にもだつた。

：あれは、妬みだと思つ。もてるんだなー

ペットができた。

名前をポチにしようとしたらすぐ嫌がられた。

良い名前はないかな？

多分次は、ペット登場します！

## 魔王様と部下ナティアス（前書き）

お久しぶりです。

不完全燃焼です。予定と違う話を投下します

## 魔王様と部下ナディアス

最近気付いたことがある。

それは、ナディイはモテるところ」と

ナディアス＝キーファは若くして宰相の役についている。いわゆる、エリート街道を突っ走っている男だ。

人心も厚く、穏やかな物腰の銀髪碧眼の美青年といった、内も外も完璧な男　さらに付け加えると、現在は女の影が全くなく、フリー。

てなわけで、婚礼期真っ最中のお姉様方からの最優良物件のうちの一つである。

つまり彼は、女性をより取り見取りできるひとつ。

「……なびく銀糸の髪は柔らかに、澄んだ冬の空を思わせる青い瞳に映されれば、皆恋に落ちる。低めの声は艶やかに、聞くものの耳を奪う……その姿は傾国の美男子」

「彼を射止めんとする乙女は数知れず、大陸の端から端までの国の中までが彼の姿を一目見ようと月竜国へ押しかける」

「…………魔王様、私のことが嫌いなのですか？」

「いやー？」

市井に出回っているナディイの人物像を読み上げるだけだよー…にしてもモテるわね~」

なう、ナディイと対談中。

本日の予定は特に何もなかつたため、前々から部下たちに聞き及んでいたナディイの噂を本人に伝えることにした。特に意味はないわけではない！

「私は魔王様一筋です！」

「はいはい、お仕事ご苦労様。

つていうかさ、ナディイがそういうことを言つから私が女の子達に睨まれとるのよ。」

ナディイは、よく私に好意の言葉を言つてくれる。いやはや、仕事熱心というか真面目というか…人間、部下に慕われる仕事を頑張りたくなるよね。そういうことを知つてると、ナディイは侮れん…

「それはすみません。しかし私は嘘をつけない性分で」

「で、さー、なんでおにはナディイの人v e rが見えないのーー！」

「魔王様つてたまに私の話を聞いてくださいませんよね。」

そしてそれは魔王様の目のせいです

「何で私には『眞実の瞳』なんてオプションがついてるの？…いらないよ！

なきや、私のここでの生活はパラダイスだったのに……！美形に囲まれた生活なんて、異世界トリップの醍醐味なのに……！」

「『いけかいとじっぷ』とは判りませんが、その眼は魔王様にとつてかなり有益なものですよ。

幾度となく助けられたでしょう？」

「そうだけどさー……」

私の眼は、『眞実の瞳』とかいう異世界使用となつていて、

これは、相手の種族とかを一目見ただけで判るようになつていて、尚且つ相手の特性とかも知ることができるのでアな体质。基本的に先天性の場合が多いんだけど、時として後天的に出現することもあるそつな。

眞実の瞳にはランクがあつて、

- ・1…相手の種族を知る（気力を使う）
- ・2…1+相手の特性
- ・3…意識せずとも相手の種族を知れる
- ・4…3+トラップすべて目で見て回避

の、およそ四段階。

ちなみに私のランクは四…しかもそのなかでも上位で、意識せずとも視界はいつも人外様方です

でもトラップ回避はかなりありがたい。

トラップは、毒とか身体異常をもたらすものも含まれてるから、私の体に有毒なものを知れるし。（実は何度か助けられたことがある）

ぐうのねも出ない私の反応に苦笑した雰囲気のスライム。スライムだから表情とかわからないから、体表の色で判断。ちなみに苦笑はうつすら黄色。

私にはナディイがスライムにしか見えないが、本当ならナディイは凄く美形。……さつき言つた？ それはごめん。鏡に映した姿ですら人型ではないから、もう人型を見るのはあきらめた。

真実の眼を持つていても、普通は鏡に映った姿までは本当の姿で映らないけど、私の眼は特別仕様で『いついかなる時でも相手の本当の姿が見える』らしい。これは前代未聞だから、私のランクはそのうち5指定されるかもってクマが言つてた。

人型を見れないなんて残念、と内心悔しがりながら頬杖を突きつつ、今度は私情に満ち溢れているｖｅｒのナディイの噂を本人の前で口にしてみる。

「『ヒリザベスちゃんもリストイーナちゃんも、あの男が奪つてつたんだ！ ここらの年頃の娘は殆どアヤツに骨抜きさ。……俺にも一入くらいよこせつてんだ』」

「魔王様？」

「『ナディイアス様？ あー、確か今はバーバラさんと付き合つてるんじゃないなかつたつけ？ 顔が良いからかわからないけど、結構女をとかえひつかえに手を出してるみたいよ。年頃の娘さんは皆氣を付けてほうがいいわ。あ、間違えた。バーバラさんじゃなくてマリアーナちゃんだったわ。……え、今はクルミアータさんと？！ どんなだけ女好きなのよ… いえ、女からよつてくるんだつけ？』」

「魔王様　？！信じてませんよね？　そんな噂なんて信じてませんよね？！」

「市場調査の一部ですが何か」

「どうや顔されても悪意しか感じられません！」

「市場には私情に満ちた噂とかあるよね～」

「洒落ですか。」

「まあ、なんにせよナディ＝女好きっていうのが定評らしいよこの女たらしめ。……でも、相手に無理強いしたらダメだよ」

「違いますから。私には魔王様だけですから」

「認めたほうが楽だよ。女たらしだって。

……大丈夫。酒池肉林にしない限り私は目を瞑つておくから

「本当に魔王様は私の話を聞いてくださりませんよね～」

その日はナディは話しかけても無視されました。

私は部下に寛大だと思うんだが、この世界では酒池肉林がデフォルトなのかしら？

そしたら禁欲をせているひとよね……でも酒池肉林で大金がかかっただし。

金のかからない酒池肉林。

そんなうまいことあるわけ……ああ、幻術で酒池肉林にいり案内！とかいいいんじやないか。

我が国の観光を担う者たちに提案してみようか。

その後聞いてみたら幻術での酒池肉林は、他の国ですでにやっている  
そうです。残念。

魔王様と部下ナティアス（後書き）

ペットでなかつた！

次はペットもしくはテディ=ベアがくるかもしぬないとか呟いてみる

## 魔王様とクリエイター（前編）

早めに投稿でもおもった。  
いつもありがとうございます...

## 魔王様とクマい部下

テデイ＝ベアは武官もとい騎士である。

そんな彼は現魔王の護衛の一人という地位にいる者であるが、氣さくで面倒見の良さから市井の老若男女に好かれている。

外見良し、中身良しの、そろそろ將軍に昇進するかもしけないという噂でもちきりの、将来有望株である。

ゆえに彼もナディアス同様、年頃の娘たちから人気である。

……………さらに彼は男性にも大人気である。

いわゆる、『兄貴』と呼びたい魔族ランキングで70位に入る強者だ。

ナディアスとは対照的に、男性に好意的な目で見られるのは人徳・魔族徳・クマ徳の差だろうか。

たまに違う意味で「お慕いします！」な輩もいるが、おおむねそんな感じで人気者。

「もふもふなのに……」

「開口一番それか」

前者は私のセリフ。

皆様こんにちは。魔王です。

本日は皆のアイドル テデイ＝ベアさんと会話します。

体表は銀色の毛。  
つぶらな瞳は紺色。

そんなラブリーな姿がクマです。  
ええ、黙つて椅子に腰かけていれば凄く可愛い子ですよ。 テディベ  
アブランドを持っているどいぞのぬいぐるみのようだ。

しかし、当部下は喋らせると凄く残念な仕様になつております。  
そこがいいと仰ってくれる方、是非その魅力の説明プリーズ。

「そういやさ、クマつて何族?  
ナディはスライムで、アリーちゃんはバジリスクなのは聞いたこと  
があるけど」

「……黙秘権を」

「却下。」

おこいら舌打ち聞こえてんぞ。

「プリチーなぬいぐるみから不穏な舌打ちって、お子様には聞かせ  
られないですよー」

「その前に俺はぬいぐるみじゃないし、アンタ以外には人型に見え  
るんだが」

「ほんと、可愛いくない。見た目だけが可愛いのは。  
……あのさ、クマつて最初のころと態度が違くない?・私のこと『ア

ンタ』なんて言わなかつたよね

「つーかな、お前だけだぞ。俺のこと『可愛い』なんて形容するのは。

態度は相手によって柔軟に変化させていくだけだ。」

「つまり親しみのもてる魔王つてことですね

「ポジティブで結構だと思います」

「貶された?！」

タメ口から急に一寧語ことされると結構傷つくな。

少々ハートブローケンしながらクマを観察する私。

愛らしいぬいぐるみフェイスから漏れる、色氣ある溜息（色男ｖｅ  
ｒ）が可愛さと妖艶さを醸し出す。

くそう、抱きしめたいじゃないか。

「で、最初の質問に戻るけど、クマの種族は？」

「忘れてなかつたか……」

先ほどよりも格段に大きなため息をつく部下。

私ってかなり寛大な上司じゃないか？

そんなかんじで数分ぐだぐだしつつ、クマに教えるとせつづく。

あまりにしつこい私に諦めたのか、重い口を開く部下ティ。

「…………です」

「え？ 聞こえない」

「だから、ヌイ＝グルー＝一族です！」

「…………ぶはっ」

「だから言つたくなかったんだ！  
アンタ会つたびに俺のこと『ぬいぐるみ』『ぬいぐるみ』言つやが  
つて！」

「いや、私のいた世界では『ぬいぐるみ』つてあつたし」

「一ヤピンなのがせりに腹立つんだよー」

「完全にハツ当たりじゃんー。」

「悪いかー。」

「魔王にハツ当たりする魔族があるかー  
ていうか私のせいじゃないよねソレ」

「数代前の魔王が俺らの一族を改名しあがつたんだよ。  
だから魔王にハツ当たりしてもかまわないんだ」

「元は何だったの？」

「ヌイ族」

「グルー＝＝ついただけじゃん！  
グルー＝＝ビッからきた？！」

「ヌイ族出身の正妃の名前。」

「…………寵愛深かつたんだね」

「……ああ。」

対談しますよ

魔王（以下・魔）

テティ＝ベア（以下・ト）

魔「それでは質問たーいむ！」

テ「いきなつビッした」

魔「「」ではテティ＝ベアさんに質問しづやおう といつ企画を行  
います。」

テ「無視？」

魔「質問は部下の皆さんからいただきました。」協力ありがとうございました  
「ぞこまつす！」

テ「そしていつの間にマイクやらカメラやらがセットされたるんだよ」

魔「ノリが悪いですよー。ちなみにこれは放送局の方々の協力によりこの企画が成り立つてますので。

……にしてもテディ人気者だねー」

テ「人気かはわからないが、俺に質問なんて需要があるのか?」

魔「あるからこんな」としてるんだよ。全部本音で語つてね。これは魔王命令でもあります。

えーっと、まずお名前をお願いします

テ「テ=ディ=ベア=ストラトス=ティファーニアだ」

魔「……名前違くない?」

テ「いつもは省略してるんだ。

……そういうば軍の登録も省略名だつたな

魔「おつと衝撃の新事実ですね。

こんなところでぶっちゃけないでください。

まあいいや『今お付き合いしてる人はいますか?』

テ「恋人のことか? いないな。

今は仕事に打ち込みたいからというのがあるし、この職業はいつも死ぬかもわからないから、相手に余計な心配をかけたくないってことも大きいかな。」

魔「いろいろ考へてるのね

似たような質問なんだけど『好きな人はいますか?』

テ「いな…あー、田が離せないやつはいる、かな。

それが恋愛感情かはわからないが……」

魔「おつと年頃の御嬢さんたち、聞き逃せない発言がありましたねー  
じゃあ次の質問。『テネイ=ベアさんの好きなタイプは?あと、  
性別とか種族とか越えられる愛はあると思いますか?』」

テ「何か濃い質問が来たな?!

好きなタイプ…うーん、やるときはやる子、かな?あと俺のこと  
を許容してくれる子とか、田の離せないけど、変なことでしつかり  
してるやつとか

後半の質問は……黙秘権を…え、無理?うーん……人それぞ  
れだけどあると思つ。」

魔「なんだか世話好きなクマらしい回答だね。

……長くなつちやつたんで、そろそろ終わりましょうかね。  
それでは皆さん、機会があればまたお会いしましょう!」

テ「聞いてくれてありがとうございました?」

魔「そこ疑問形なんだね。」

魔テ「「それではさよならー。」

## 魔王様とクマ二郎（後書き）

ついでに、そベットが出ますー！

ティーディの本名が明らかになりましたねw

## 魔王様、ペシト（仮）を拾つ（前書き）

お久しぶりです。

予定通り、ペシトとの初対面をどうぞ一

## 魔王様、ペツト（仮）を拾つ

「…………。」

「…………。」

「…………。」

「…………。」

どいつも、魔王こと悠です。

現在ある方と、とても熱い視線を交わしています。  
視線なんて逸らせません。

その相手の殿方はとても素敵な方です。

その方は、

全体的に細身ながら綺麗に筋肉の付いた、無駄のない肢体。  
紫色の切れ長な瞳。

夜空を思わせる、すべてを包み込むような闇色の……毛皮。

はい、『人外』の殿方です。

雰囲気的に怜俐な感じなので多分 でしょう。

そんな彼は見るからに美獣さんです。

尻尾とかふさふさしてて是非ブラッシングをして差し上げたい。  
そんな私ですが、只今猛烈にあせっています。

理由としましては、その……田の前にいる獣さんです。

先ほど『視線を逸らせない』と言つた理由なんですが、彼の口から除く素敵犬歯の鋭利なこと。多分視線を逸らしたら喉元をやられる気がしてならないので逸らせません。

相手が美獣でも、命には代えられません。

それに私は動物が苦手なので。

あれだ。見る派つてやつだ。

で、若干固まりながら田を逸らせないでいる私なんですけど、なんといつか

美獣さんも田を逸らせない

つてなんなんだろつ。

あ、今更ながら美獣さんの外見説明ですが……

黒豹と獅子を足して一で割つた感じです。

判りにくい？

うーん……黒豹を更に美形にして威圧感を増したのがこの美獣さん。

「ガルルルル……」

「つをつ」

唸られました。

迫力満点のその姿に、思わず体を引く。

……おい、そこでなぜ一歩踏み出す。

ためしにまた一歩下がる……と、踏み出す黒いの。

何でだちよつと怖いじやねえか、と心の中で呟きつつも田は逸らさず、少しづつ下がる。

そうして壁際まで追い詰められ……るような可愛らしい神経を私がしているわけがなく、あえて逆に二つちが一歩踏み出してみる。しかし向こうは下がらず、逆に距離が縮まる。えー…。

まあ、人生には意外性が必要だよね、とか現実逃避をしてみたり。

「君は魔族なのかな、それとも魔獣なのかな？」

「ガウッ」

「私の田には魔獣にしか映らないので、魔獣つてことで。  
…訂正があるなら一度鳴いて。」

「グルルルル…」

「つまり当たらずとも遠からず、ってことかな？」

基本的に、異世界使用となつた私の体は魔族の言葉を聞いたり話したりすることができる。

公用語はもちろん、古代語なんかも翻訳されてるらしい。

しかし、『魔獣の言葉』や『破廉恥な言葉』は翻訳されないといつ。一応未成年である私には教育上ちょうど良いらしい。

「…つてこつか君ひとつ？」

目の前の黒豹に気を取られて後ろからガブリは嫌だ。今更だが、魔獸は基本的に意思疎通ができる。会話を交わせるのは少ないが、ボディーランゲージ　頷くとか、手足を振り回すとかで意思疎通をするとといふ。

が、

意思疎通すらしてくれない、この猫科の魔獸に懲りなく再び声をかける私つて健気。

じつと見つめるとプライドと顔を逸らし、長い尻尾をべしべしと地面に吊き付ける。

……何だこいつ可愛いやじやないか。

猫が尻尾をピシピシしてるので、たまらん可愛さがあると思わな  
いか。

猫好きならたまらん仕草だわつー

「お持ち帰りしていい?」

真顔ででっかい猫に話しかける魔王。つて今更だが、かなりシュー  
ルな気がしてならない。

返答なしに猫を伴い、城に帰還する私。  
どうやつたか?

それは「都合主義の魔王の力というものですよお嬢さん!…失礼、

旦那様もでしたね。

ハイテンションの私をドン引きしながら迎え入れてくれた魔王城の皆さん、ありがとうございます。

「アンタ何引き連れてきてんだ？！」

「やほー テディ。これ飼いたい」

「『飼いたい』って魔王様、そちらの方は『飼う』レベルじゃないですよ？！」

「ナデイ、私思うんだ。

……一城に一匹猫が必要だつて。

魔界つて猫アレルギーとかある？」

「それはないが…………『猫』？」

「うん。名前は『レオン』にしようと思つ。いい？」

「ガウッ」

猫・レオン（仮）は我関せずといった風情で私の足元に寝そべつていた。尻尾は緩やかに揺れている。

勝手に連れてきてしまったが、特に怒っていないみたいだ。  
むしろ城の環境に怖気づくことなく寛いでいる。

……君は将来大物になるよ。

「本人嫌がつていみたいだし、決定つてことで」

「「ええええええええええええええええ？」！」

その数日後、月竜国の魔王は変人という噂が流れることとなつた。

しかし後悔はしていない！

レオンの毛並は抜群で毎日もふもふしてます。

大きな猫（？）に埋もれている魔王の姿が見られることとなつたせいで、さらに変人のランクが上がつたとか私は断じて認めない。

魔王様、ペジト(仮)を拾つ(後書き)

お気に入りしてくださった方、本当にありがとうございます!  
次も新キャラが増えそうです

魔王様、もの扱いられる（前書き）

今回のはこまこちです…

魔王様、もの扱いられる

「おいやこのお前、僕のモノにしてやるー。」

ここにちは、あなたの魔王です。

現在クソガ…げふん、お子様に絡まれてます。

子どもと話すときは田線を同じにしまじょり

本日は特に予定もなかつたので折角だから城下の様子でも見ようか  
と、一人で身分を隠して行動です。

ナデイに後で泣かれようがクマに殴られようがアリーちゃんにビン  
タされようが私は行くんだ！

我が月竜国でも観光客田並てな商品とかが置いてあるので、ウイン  
ドウショウツッピングだけでも楽しい。

そんな感じでアクセサリーだと光物・食べ物をメインに見て回つ  
てたら、ガシツと右手を捕まる。

これは見つかつたかなー、と部下たちが『えてくれるお仕置き』一  
スを何パターンか思い出す。

あの魔族のお仕置きだけは止めてほしいなとか希望的観測。

しゃーない、自分の行動は自分で責任を持まじょり、甘んじてお  
仕置きを受けるぜと、半ば漢らしく腹をくくしながら後ろをゆっく  
りと振り向く。へタレ言つた。

すると……見たことのない半獣くん。

鳥っぽい人間ていうのかな、一足歩行してる鳥人間ってかんじ。金色に近い毛で、背の大きさから多分少年くらいの年だと思つ。勿論、背に翼が生えています。ぴよぴよ動く姿は触りたくなる誘惑にかられる。

ちなみに鷹だと思つ。

こんな子知り合いにいたつけな、と思つて少年を見つめると……

冒頭のセリフを浴びせられました。

てなわけで、変なお子様に絡まれております。

これは日頃の行いの賜物ですかね。

クマの首に、瞳の色に映える青いリボンを結んだからかな……。それとも、ナディイ宛に幻術・酒池肉林コースのパンフレットを送ったからかな……。

……全部グッジョブじゃないか、私の行動。

「…………ビシリへんが君の御眼鏡にかなつたの?」

多分この少年はいいとこのお坊ちゃんなんだろ?。でなければ、初対面の人間に『貴様を飼つてやる』なんて言わないはずだ。

下手な対応をすると、後々面倒くさくなるはずだ。

……あれ? 私つて何の職業についてたつけ?

「その凡庸な顔立ち・背景に溶け込む平凡な雰囲気が僕の心をくすぐるんだ」

「おいゴラ貴様ケンカ売つてんのか」

すぱーん、と少年の頭を叩いた。

数秒前の決心どこ行つたとか聞かないで。

……私、魔王。うん、きっと大丈夫。

黄金の右手（古い？）をびっくりした表情で見つめる鳥少年。

「な、主に手を擧げるなんて……！」

「誰が主だ馬鹿者」

誰だこのガキを教育したのは。

とか考えていたら、背後から叫ばれた。

「坊ちやま  
…………」

やめて鼓膜に優しくして！

大音量での突進に、眼前の鷹少年は両耳をふさぎながらその声の主をつつとつしそうに見やる。お前の知り合いか。  
そいつは少年に勢いよく突進し、むぎゅつかつか……と抱きしめた。

「じい、煩い暑い痛い」

「じいは心配いたしましたぞ———.」

ヤギでした。

誰がつて？

それはもちろん『じい』です。

帰りたい

帰つていいかな？

お腹すいたからもう帰りたい。レオンをもふもふしたい。

若干現実逃避をしてたら、主従コンビは一人で話し始めた。

「坊ちやま、この者は？」

「新しい僕だ」

「おい、頭が高いぞ。坊ちやまに拾われたことを光栄に思え」

「誰が僕だ。誰も許可してないけど

つていうかあんた世話係なんだからそのクソガキから田を離してんじゃないよ」

「お前、坊ちやまになんて口のきき方を——.」

「知るかヤギ。

さよなら一度と会こませんから」

レオンに愈されよう。

尻尾を触らしてもうおひ。

「待て！」

呼び止めるな童よ。

我は欲望に付き従つのだ！

「主を置いてどこへ行く！」

ブツツンしたのでシカトして帰った私は悪くないと思ひ。

その日、ペットから離れない魔王様がいたといつ。

## 魔王様、もの扱いされる（後書き）

多分その内、後日談をさせていただこうと思っています。

「月竜国の魔王様の、」机嫌も麗しかつ……あれ?」

「あの時の僕?」

みたいな。

## 魔王様、勇者になる？（前書き）

今回もあまり間隔を開けずに出せてよかったです。

## 魔王様、勇者になる？

「勇者様、どうか我らの世界をお救いください……－－！」

いや私、魔王ですから。

初っ端からソシ「ミ満載でみません。  
ジョブチェンジしそうになつてる魔王です。

『何が起きた』

この一言に尽きます。

事態は数刻前に遡ります。

こんなにちは異世界。……異世界？

会議中に足元から魔方陣が現れて気づいたらこの場所に居ました、  
以上。

説明になつてない？

大丈夫。私も説明ができるほど状況確認がてきてない！

だつて考えて見てくれ。

『会議中』だよ。

何者も邪魔できぬように、厳戒態勢を。つまり私とか国の重要人物に対する警護をしていたにも関わらず異世界召喚とは、これ如何。しかも魔王召喚とかなんだ。おい、どこのサバトだ。

召喚特有の視界妨害で視界が真っ白に染まり、晴れた。  
ぐるりと見渡すと ライライこいつあまたどつかの魔界か  
こん畜生。

やつぱり人間はいませんでした  
うん、わかつてた。でもね、期待してもいいだろ？  
そして……

「勇者様……術式は成功したぞ——」

……勇者？

状況確認のために相手の話を口を挟まず聞いてみると、この国は今、世界規模の脅威が襲つてるらしい。

それを回避するために勇者

つまり私を呼んだといつ。

これはあれか。

私は異世界召喚の『魔王』と『勇者』ルートをコンプしたことになるのか。もしかして異世界召喚のすべてのルートをコンプする運命にあるのか？マジでかふざけんな。

で、脅威は何かといつと…………聞好み、他の種族を厭う存在だ  
そうです。

「凡庸な娘、貴様はとにかく我らに力をかせ」

兎な巫女姫が一段高い椅子の上から頬づえをついて頼み込む。

……兎って、もつといつ　　癒し系じやなかつたつけ？  
どうしてかな、殴りたくなるんだけど

その姿に冷や汗を流しているのは、多分神官長だと思わせる狸。

（マジ誰かこの女どうにかして一人にものを頼むつて姿勢を誰か教えてやつて！）

こんな心の叫びが聞こえてきやうだ。

この手のたぬきつて、もつといつ

狡猾なんじやないか。

利権にむさぼるつていうかや。

あの兎、こっちが断るなんて思つていないみたいだ。

まあ、断られたら脅せば済むと思ってるんだろうな…つかこの剣先を四方八方から向けられた状況で断る奴なんて普通はいない、ね。

あいわかつた。

「遠慮します」

あえて断らう！

「衛兵、斬れ「斬つて良いの？」……なに？」

兵士の動きが止まる。

兎は私の言葉にかかつた。

「貴方たちは、私が『』に誘拐されてきたのを『成功した』と言つた。

それはつまりこの誘拐が成功する見込みが薄いこと。その成功例をみすみす殺してもいいのか聞いているのだけど

狸が兵士たちに田をやり、刃物を私から遠ざける。

狸は曲がりなりにもかなり位の高い者 のようだ。兎とびっちが高位なのがわからない。私の疑問を知らず、兎は続ける。

「面白い」とを言つたが、それなら貴様を斬つた後また召喚すればいいだけだ

「じゃあ何故そこの者が兵士を下がらせた。

つまり、私の言つてることが正しいのだね？

狸は数度口を開閉させる。それは金魚の呼吸によく似ていた。  
きっと、「しまった」とでも思っているのだろう。  
しかし兎は口角を上げ、続ける。

「ならば、成功するまで続ければよいだらうへ。」

くすり、くすり。

尻尾が蛇の兎は騒ぐ。

お前は逃げられないのだよ、と。

尾の蛇も、どこか嘲笑ついているかのようにうなづねと蠢く。

良い性格してるじゃない。

流石、支配者として君臨してこられたやうの奴とは違うね。

でも、

「それをする時間と労力はあるの？」

これくらい氣づいてるんだよ。

異世界召喚なんて不確かなものに頼るつてことは、それほど状況が  
切迫してゐること。

新たに誘拐する暇はないだろうし、時間があるのであれば限界まで  
それに力を入れるのであれば国の防衛に力を割くのが当たり前だ。

地盤（国防）が悪ければ勝てる戦も勝てない。

といふのが、私の考え方。

残念だったね。相手が私でなければ、ほとんどの者が従つてたんじ  
やないかな？

まあ、カマをかけてみたけど乗り切れてよかつた。

そうして、

「 我ら人が、魔王などに勝てるはずがないだろ?...」

「 は?人?」

「何を言つておる。人に敵対するものを纏める異形の者は『魔王』と呼ばれるにきまつておらひ」

「魔王?え、ヒヒヒヒビ?よ。何族がいるのよ。」

なんだか、誤解があるようだ。

彼らに話を詳しく聞いてみると、ここは人間の国だった。  
じゃあなぜ私の眼には人間に見えないかというと、憶測だがこの『  
眼』のせいだろう。

ここでも私の美形ウォッチングの野望は潰えるのか……………!

## 魔王様、勇者になる？（後書き）

これは一応、続きます。

個人的に魔王が勇者の役目を果たしたら面白いなと思いまして。

ちなみに理ですが、そのうち番外編でこいつを主人公にして書こうかなあとか思つてみたり。

## 魔王様ちよこす魔者の杖器（前編）

かわいいと懐張りました

## 魔王様ちょいす勇者の武器

「んにちは、魔王です。

乾いた笑いが止まりません。

初期装備は、聖剣ではありません

結局あの後、お城の玉座に無理やり連れて行かれました。

薄らハゲででっぷり太った鷹みたいな王様の前で跪かされそうになつたり、それに鼻で笑つたら牢屋に連れて行かれそうになつたり、官僚たちからの值踏みする視線を集中砲火されたりと散々だつた。とりあえず言いたいのは、王様もつたいない。

ちなみに王子っぽいのもいたけど、彼は亀だつた。  
何で鳥類から爬虫類が生まれるんだ。  
……本質の違いか。

今更であるが、この世界においては相手の本質がその者の姿をかたどつて私の脳に映像を送つているらしい。実に面倒な機能である。

ちなみに話によると、王子様はリアル王子フェイスで超美形らしい。

これはメイドさん情報なのでかなり信憑性がある。

彼女らによると城にいる人間で王子レベルの美形はもう一人いて、  
彼は騎士団長を務めるほどの腕前だそうな。

「つきしぬがらその姿を探すと、…………鷹でした。

まじか王様と同族かよ、と思ってたら、これまたメイドさん情報で鷹騎士さんも王族の血をひいているそつだ。先代の王様の孫みた

いで、現王様とは従兄弟の関係にあたるらしい。つまりこの国は世襲制で、国王の位が息子飛ばして孫にいつたんだな。

で、

「 もあ、 この中から武器を選ぶのじゃー。」

バニー巫女がハイテンションで私に言ひ。え、何このテンプレ。異世界召喚らしくて涙が出てくるよ。これで会う人が皆人型だつたら言ひことないよ、私。

ちなみに状況説明ですが、只今宝物庫・勇者専用とかいう部屋に連れていかれました。

つていうか、普通勇者の武器つて剣じゃないの？もしかして最近では複数の誘拐が流行つてゐるの？そして皆その役目を押し付けられてるの？

もつも、召喚術なんて封印しちゃえればいいんじやないかな。

と、個人的感情は置いておいて、

宝物庫の中には七本の武器があつた。

赤青緑茶白黒……と、包帯巻き。

なんか一つおかしいのないか？！

「 なにあれ。ねえ、武器に包帯とかおかしくない？一せめて封印とかのせいでお札とかだよね？！」

「あれは特別で、勇者の武器には含まれとつませんぞ」

「 狸が私の叫びに答える。いたのか貴様。

え、武器じやないのあれ。なら何でこりにあるんだ。

「諸事情といひやつです」

「御託は良いからとつとと選べ…………ああ、武器に選ばれなきや  
使えんからの」

「それ、選べじやないよね。選ばれろだよね」

「基本的に勇者といひものは複数の武器に好かれるから。選ぶこ  
とに変わりはない」

で、

「ねえ、全敗なんだけど。

おい兎、複数に好かれるんだよね。何これ。全部が私に拒否反応と  
かおかしいだろ。説明しろや」

「『基本的に』と私は言つたぞ。

といつより、我は初めて見たぞ。こじまで拒否される奴は

焦げたり水浸しになつたり、壁に亀裂が入つたりともはや部屋の  
機能を果たしていない惨状が目の前に広がつていた。

まさか私が魔王ポジションにいるから、奴らは嫌がつてんのか?!

「巫女様、最終手段だが一応アレも試してみませんか?」

狸が兎に進言する。

兎はそれにつづと考へ、ニヤリと笑つた。怖いよ。

「よつし勇者よ、あの包帯のも試してみる?」

「……ナビヤ、何でそんなに楽しそうなのが教えてくれない？！」

そんなこんなで包帯に手をかける。

「み、見えない…………だ……ってあれ、見えんじゃん。さつきまでのは何だつたんだろ。……へー、綺麗な銀色のレイピアだね。持ち手が鱗みたいで面白いし。」

「、なん……だ……と……？…」

お互いが驚きの顔を上げる。

「スケルトンを扱える奴がこの世にいるとは…………  
それは、建国の際に尽力した巫女・アリー＝タータンリート様の愛  
剣であるのに……！」

なんとか、知り合いでよく似た名前だなあ。

「ていうか、その剣は闇属性の中でも群を抜くほどの中黒  
暴さを持つてるんだけど、お前本当に勇者か？…」

「少なくとも勇者と名乗った覚えはないね」

ついかそんな物騒な代物をここに放置するな。

武器が決まりました。

知り合いの女性を髪髪させるようなレイピアです。『毒』との特殊効果があるそうです。

消毒もできるやつなので、いろいろと活躍しちゃうです。

とりあえず、どうでもいいですが早く帰りたいです。

## 魔王様ちよいす勇者の武器（後書き）

今回のタイトルは悩みました。

もつひとつは「魔王様、勇者見習いになる」です。

しかし何も勇者として訓練をしていないので却下しました。

まあ、訓練するかそのまま「魔王城か悩みますね…」

お気に入りしてくださった方、ありがとうございます。

駄文ですが、精進いたします。

## 魔王様とお魔さん（前書き）

今回は第三者視点を入れてみました。  
書きやすかったです。  
普段以上にぐつだぐだですが、頑張ったんです。私にはこれが限界  
です

「来るなバカ…………！」

神様、私が何をしたというのです。

皆様、さきづんよう、そして走っている方、仲間だ。是非私と友達にならう！  
只今全力疾走しております。

ラブロマンスを求めて

事態は数刻……いや、数日前に遡る。

故あつて召喚といつたの誘拐をされた私は、ここ数日特訓といつたのシゴキを受けていた。

現代の日本で、しかもインドアな花の女子高生にする行為ではないと思うんだ。そりやあ、異世界補正の男子であるならばまだ判る。しかし、私は女子。

この世界は女性の扱いがなってないんじゃないかな。魔王云々のまえに、女性における権利拡大を進めればいいんじゃないかな。

とまあ何故現実逃避をしているかといつと、

「勇者様、わきを締めてください！」

「むーりー！」

若鷹に切りかかれているからだよ。

ちなみに、王様と区別して騎士団長の彼のことは『若鷹』と形容することにした。

今では薄ら禿な王様だが、若いときの武勲を世界に轟かしていくたそ  
うだ。

残念なことに王子には、その武才是引き継がれなかつたそうで、ど  
ちらかと言えば若鷹のほうが若かりし頃の王様に似ているらしい。  
まあその代り、王子様は魔術と治政の才に恵まれているとか。

向かい合つ鷹は、凜々しい。

今まで見てきた中で一番の美鷹ではなかろつか。

でもね、私が見たいのは人型の美形なんだ。だから『めん、きみの  
造形に感嘆できないんだよ。どちらかといふと母なる自然をたくま  
しく生きるその姿にしか溜息は出ないんだ。  
え、分かりづらい？

一言で纏めると、鷹の美醜は私得ではない。  
どちらかといふと、もつふりしたほうが私得だ。

でもなあ、この鷹すつごい美声なんだよ。ナディ並に腰に来るんだ。  
耳元でこの声に笑われてみる耳がご臨終すること請け負おう。声フ  
エチでない私がこうなんだ。もつ、歩く卑猥者なんじやないかこの  
人。それほどまでの犯罪ヴォイス。

「逃げてばっかりでは、魔王なんて倒せませんよ」

「倒すなんて一言も言つてないし、まあ勇者と認めてないから。」

「往生際が悪いですよ……」

若鷹が剣先を唸らせながら、私のがらんどうな胸を狙う。おい待て、女子はお腹が大事なんだよ！ それをとつたに右に下がることにより躰す。あつぶな……

こ、この野郎、本気だな

美声だからって、何をやせつても許されると思つなよ……

「えーい、その羽をむじつ取つてやるー。」

やられっぱなしさに合はないし、そのまゝかまつてしての翼をもいでやるー……

「…………上等だ、かかるてーーー」

そしたら何故か若鷹の空気が凍りついた。

俺はジエームズ。しがない軍人の一人だ。

普段なら、我々軍人は団長からのシゴキ…げふん、愛の鞭をうけている。

しかし本日は勇者様と団長が打ち合っている。

この勇者様、魔王との最終決戦のために我々に協力してくださる、高貴なお方なのだとか。

それにしては少し…いやかなり、どこにでもいそうな空氣をまとつた娘だ。

俺としては本当に勇者なのか信じられないが、巫女姫さまがそう仰るのでそいつなのだろう。

団長の愛の鞭が数日減るだけで、俺にとつてはすでに株が上がつてるから何でもいいや。個人的に言わせてもらつと、勇者様がんばれ。多分団長は殺しはしないと思う。

実は団長は『鬼』と呼ばれていて、練習中は初心者相手でも手加減しない。

勇者様本人は初心者だと言つていたので、我々騎士団員は多大な心配を寄せている。

それで、勇者様なんだが……あの人絶対初心者じゃない！

団長からのプレッシャーを受けて動けるつてどこからしておかしい。でも、動きはかなりたどたどしい。もしかして、普段は剣なんて使わないのだろうか。そのせいだろうか。

それよりも気になるのが、勇者様は本当に女のなのだろうか。おとこにはまつまつとくと言つていいほど興味のない俺が、団長の顔には見惚れるんだ。その団長の視線を一身に浴びながらも平然とかつしかめつ面してくるなんて、本当に女か？

この手の年頃の娘なんて、団長を見ればクラリとし、ひと声聞けばクラリと倒れ、話しかけられた日には昇天するほどの浮かれっぷり。…………少しは見惚れろよ！

俺ラブロマンス大好きなのに、そんな空気全くない。団長は勇者様に興味津々なのに、勇者様全くと言つていいほど『恋愛？ナイナイ（笑）』とか言つてる！

美形騎士に迫られる勇者（村娘）とか、俺の大好物なのに！姫君と騎士よりも大好物なのに！

そうしたら、

「羽をむしり取つてやるー！」

勇者様がすゞいこと言い出した。

我ら騎士団は、別名『雷鳥の爪』と呼ばれている。  
故に、我らの軍服には翼が描かれている。

それをむしり取るということはつまり、『貴様は雷鳥の爪の団員にふさわしくない』〇へ『私に服従しろ』と言われるってことだ。勝つたほうが負けたほうを好きにできるってことだ。決闘的なあれどちらにしろ、今を時めく騎士団長に言うセリフじゃない。

ちなみにこの決闘まがいなもの、代理も〇kである。たまに、どつかの貴族の娘が美形騎士を得ようとお抱えの騎士に『やりなさい！』と命令。実はお抱えの騎士は主人のことが恋愛感情として好きで、アレ何このカオスと言いたくなるような愛憎劇が見れる。この手の話は巷の乙女たちに愛読されていて、文庫版として販売されているから気になる方は是非どうぞ。

マジでこの一人口マンスがない。最近の幼子ですら『わたしまた大好き！お嫁さんになつてあげる（はあと）』とか言つてんの

に！あー彼女欲しいいいい

まあ、そんな宣言をされた団長は、人形のような美貌から表情を全てそぎ落とした。

..... )

美形が無表情とか、何それ誰得？！少なくとも俺得ではない！

ロマンスが音を立て遠ざかる。

そして

「勇者様、一生ついていきます！」

「来るなバカ！」

「うなつた。

何があつた？

ごめん語りたくない。他の奴に聞いてくれ。  
もう俺、砂と血を吐けると思つんだ。

文章で読むロマンスと、実際に田にするロマンスって、大分異な  
つてるんだね。よくわかつた。理想をリアルに持ってきてはいけな  
いんだね。

とりあえず、

あらゆる意味で勇者様頑張つてください。  
我ら騎士団は両手の掌を合わせて応援しています。

魔王様とお魔女さん（後書き）

もひとつ、「彼女欲しい」と叫ばしてみたかった。  
ちょっと、書類を呟しました。

魔王様と恋する娘と…………魔王（前書き）

かよつと遅くなつてすみませんー

## 魔王様と恋する鬼と……魔王子

テンプレってなんだね？

こんばんは、テンプレと王道ってどう違うのかわからない魔王です。かつて皆さんと同じ地球にいた頃の友人ならばそこらへんを熱く語ってくれるのですが、生憎いません。

というか、ずいぶんじ無沙汰しています。あのじるは毎日会っていたのですが。

彼女の言葉が未知の言語過ぎて、右から左に流していたせいでしょうが、知識が断片過ぎて何が何だかわかりません。元の世界に帰れたら、是非とも彼女にメールをさせて頂きたいと思います。

まあ、そんなこんなで異世界で過ごしています。

ちなみに私の考える王道は、

- ・ハーレム
- ・美形わんさか
- ・乙女ゲー攻略キャラ

です。

え、腹黒鬼畜敬語キャラ？ オプションで眼鏡？  
バツチコイだ。でも現実にはいてほしくないよね。

親しげ口調腹黒キャラ？ オプション眼鏡？

ええええ… 考えたことない。個人的には『鬼畜』あるほうが好きかも。

王道？そんなの捻くれた奴には物足りない！

若鷹と親交を深めた後、なぜか私は兎に呼び出された。

「おい、お前……アレか？」

「アレって何ぞ？」

「ラキアス様との」とに決まつておひづが！」

「…………誰？」

「騎士団長ー」

今日の収穫

若鷹（騎士団長）の名前はラキアス

「で、団長がビーハッたって？」

「い、いや……その……おおまは今やつれまの方と親しく話して  
おったるじへ

の方は王族で、普通ならお前のよつな下賤の者は近寄れないんじゃ……だからな、もしそんな恋慕の情など抱いていたらふ不憫での、ゆえにお前はおの方をどう思つて居るか、き聞きたくての「

終始語尾を上げながらの発言である。

長い。

どもり過ぎ。

テンションが高い。

普段の兎ではない。

何が彼女をこうたらしめたのだろうか……

「……ああ、恋か」

「黙れい！」

「冗談だったのに、当たつていたらしい。  
とこづか、ここにきて初めての恋バナー私のテンションも上がるよー」

真っ白な毛を赤く染め（断じて赤い色素で染めたわけではない）、  
尻尾の蛇を振り回し（いつの間にカリボンがついている）、もじも  
じと可愛子ぶる兎。ぶつちやけキモイ。

「うん？ もしかして私は、ライバルとして見られているのだろうか  
いや、無理でしょ。鳥類愛好家でもない私が、若鷹さんを恋愛対象  
に見れるかといつと、結構無理がある。」

「私は団長さんを思慕してないからで、いらぬ労力をしないで他に裂けば？」

正論を言つたのに、兎がさらに興奮した。何故だ。

「そんな言い方ないであろうーーー。

……まあいい。お主の言、しかと忘れるでない」

兎が苛ついた様子で地面を足で踏む。

「「めん?

…あのや、団長のどこが好きなの？差し障りがなければ教えてほしい

「ぬ、主には関係なかろう！」

「ねえ、」

第三者からの声掛けに、私と兎は勢いよく振り返る。

「話しねのところ申し訳ないんだけど、勇者様とお話ししたいんだ」

亀王子がいた。

途端に跪き首を垂れる兎。その姿により、ここでは王族が神殿よりも力を有していることが明らかとなる。

うーん、個人的に兵士たちの反応から王族にかなりの影響を与えてると思つてたんだけど、読みが外れていたみたい。もしくは、『国

王一家』のみに付与される服従……かもね。

まあ、どうりにじるこの世界に骨を埋める氣のない私には関係ないことだけど。

「それで王子様、私に何の用でしょうか?」

「敬語はいらないよ。…クルト、席を外してくれる?」

「かしらました」

巫女姫に命令できるってことは、王太子の権力も大きいのか。  
あと、クルトって言うんだ。コーンスープが食べたくなる。

「逢引の邪魔をしてごめんね。

…兄の非礼を詫びたくて」

「兄、ですか」

「叔父…ラキアス団長のことだよ。僕にとつて、あの人は兄みたい  
なものだから。

…普段はあんな人じゃないんだけど、貴女には少し違った気持ちにな  
るみたい。」

いりませんがなそんな気持ち。

亀王子は甲羅から首をのぞかせ、ゆっくりと下げる。

「でも、勇者殿には迷惑をかけてしまったみたいで申し訳ない」

そういうと、私の右手をすくい口元へ。

「  
」

と思った瞬間に、手のひらに感触が。

叫  
ん  
だ

和ではなく、外野である。

とにかくやかましい。

たかが亀にキスされたくらいでどうしたというんだ。

あ、王子か。

うわあ面白いこと思いつづ右手を取り戻し、やんわりと切り出す。  
とたんにむつとくねくね。いやいや、私にすみて時計でおかしく  
からね。

「申し訳ないのですが、私はこの国の習慣に慣れておりませんの。ですので、このような形をとられてしまいますと、私はいたたまれなく……ああ、そういえばクルトに用がありましたの。では王子様、私は失礼させていただきます。」

そうして私は戻つていつた。

親しげな王子キャラは嫌いじゃないんだけど、個人的にはクール王

子のほうが好きなんだよね。シンデレラつてよりも、ただ感情が出にくいで勘違いされやすいからちょっとスレてしまふ不憫王子がいい。

見た感じ、不憫集は全くしないのに近づく必要はないよね。そもそも亀にしか見えないし。

彼のお出ましです

俺はジエームズ！

じゃない騎士の一人だ。

今日も俺は可愛い子ちゃんに熱烈アプローチ！

結果？今一人でいる時点で察してくれよ……

まあ、勇者様への忠誠を誓つた団長に苦笑しながら了承する彼女は、巫女姫様に連行されていった。

いつの間にいたのかわからないが、俺の記憶が正しければ今の時間は『お祈り』をされているはず……。

まさかね。うん、巫女姫様に限つてそんなはずないよね。

とかそう暗示をかけていたら、王太子殿下の登場。

……つて勇者様、アンタ殺されたいんですか？！

『あの』王子を前にして突つ立つて命知らず…………

そつしたらやけに機嫌のよくなつた王子が流れるよつた仕種で勇者殿の右手をすくい、口元へ……。

忘れちゃならないのが、口づけながら相手の眼をじっと見つめる……

上皿づかいで。

「——に落ちひやつた——勇者さま——

とか外野は考える。

勿論その口づけの瞬間にメイドだとかお嬢様だとか巫女姫様の絶叫がすごかつたよ。俺、鼓膜敗れるかと思つたし。

その絶叫の中、勇者様を見ると……平然としてらりっしゃる。うつわ面倒くやことこの空氣を纏うともせずに王子に別れを切り出す勇者様。

ヨイライ、國の一大美青年を田の前に、何も反応しないって……アンタ本当に大丈夫か？

うちの王子なんて、瞬きをするだけで相手は恋に落ちると言われるんだぞ。

甘いマスクの顔立ちは、男でも惑わすんだぞ。  
その美貌に全く反応しないのは団長だけだと思つてたのに、もひ..  
……勇者様武勇伝は限りを知らないんだな！

勇者様の遠ざかる後姿を、王子はじつと見つめる。

それがあるで肉食獣の狩りにおける田に見えたけど、『氣のせいだよな。

うん、きっと王子の眼鏡に反射した光の加減だよな。  
なんか小さな笑い声とか聞こえるけど、きっと幻聴だよな。

そんな時、王子の声が俺の耳に届いた。

『へえ、ナカセたいね』

その澄ました顔、ぐつちゅべひゅこじてやつた。

聞こえない。俺には聞こえていないからな！

## 魔王様と恋する鬼と……魔王子（後書き）

最後の部分がいまいちですみません。

あの、読者の方で気になる単語があつたと思つんですが、実は間違えではないんです。自分でも「明かしたい」とか思つてました：でも、ここで明かすのはなんとなく嫌でして……それは後程判明しますので！

にしても、勇者編長い……

**若鷹・亀王子へ老鷹を觀戦するのは魔王様のみ（前書き）**

はつやり言つて、今日は後半部分からギャグではなくなります。  
人によつては氣分を悪くさせることがあるかと...  
そんな方は是非とも回れ右でお願いします。

若鷹・亀王子 v/s 老鷹を観戦るのは魔王様のみ

三つ印。

暁ドラにおける定番である。

恋愛における定番でもあるが、暁ドラのほうがドロドロしている感  
が否めない。もはや暁ドラ口だよね

多角関係は複雑模様。それが恋愛関係なら泥沼模様

玉座は大広間に存在する。

そこは会議場ともなつていて、国の一大事には必ずそこで行われる。  
魔王を倒しに行く勇者のお供を選出するのも『国の一大事』と分類  
されるようだ。

しかし、それは今現在難航している。  
私個人としては誰でもいい。

だから、今回は傍観者側とさせて頂こう。

「それが許されるとでも？」

若鷹が全身の羽毛を膨らまし、静かな声で告げる。

議場には静かな怒声が響き渡り、その場にいるものを委縮させるこ  
は十分なものだった。

美声の怒声って、こんなに腹に響くものだったんだ……

「お怒りは判りますが、我はこの戦いにビリしても参加せねばならぬのです」

「ラキアス、そんなに怒らないでよ。」

兎と亀の発言に、猛禽類独特的眼光鋭い目をさらに強める若鷹。相当な怒り具合だが、二人は平然と……否、飄々としている。煽るなよ。

「貴方たちは、自分の立場を判つていなければ?」

口調こそ丁寧だが、その分周りの人間に怒りのほどを感じさせる。

とつあえず部屋の室温を下げるのはやめようか。

当事者ではなく、周りで傍観している者達に被害が及ぶとはこれ如何に。

そんな外野の状況を知りもしない若鷹は、ぐるりと体を反転する。

「王よ!」

「えつ、ワシ?...」

眼光鋭く、王子の父親であり自身の兄である王様にターゲットロッド クオンする弟の騎士団長。うむ、老鷹 vs 若鷹ですな

「国王様、威儀が……」

「神官長よ、そつはいつても我が弟を前にしてそんなことができると思つか?」

古狸が王様に進言するが、ヘタレ王は弟の恐ろしさを語りだす。

「アヤツはな、五歳の時に我を物理的にも精神的にも倒したのだと  
！下手に反抗してみる、命をとられるわい！」

もつお前、弟に王位譲れよ

この場にいる殆どの者がそう思つた。

二十以上も年の離れた男ざかりが、当時一桁の弟に負けるとかおかしいだろ！

これが一国の王の姿である。この國の大臣どもがいかに優秀かが判るといつものである。

「まあ所詮、父上」ときでもすじ

王子　　ー？

オブラーート？何それ。

そんな態度で父を貶す息子。

え、何これ。親子中冷め切つてんの？

「まあ、ワシとしても早くお前に王位を継いでほしいんじゃが……  
下剋上出されてもかなわんし」

それ絶対後半が本音だよね。前半は建前だよね。『誰に』とは聞かないけどさー

「「私（兄上）は王位に興味がないので」」

父親よりも叔父との仲のほうが良好って感じよ。

丸々太った鷹王の額から冷や汗が流れている。顔が悪い。……間違えた、顔色が悪い。

「いや、どつちかといつと息子なんじゃが……」

「まだ私には荷が重いので、時が充ちたら頂きます」

「その時は手伝つで」

何この修羅場。

王子、アンタ自由な時間に飽きたら王位を継ぐつて……

王様、ガンバ

「もうヤダここいつり…… クルト、王族に帰つてくる気はないか？お前だけが清涼剤だ！！」

「え、嫌です」

バツサリ斬る兎。

「王よ、それでは巫子がいなくなつてしまひます」

狸が嗜めるも、王は渋る。

「しかしじゃな、我的気持ちもわかつてくれ。

クルトは我が従姉妹にそつくりなんだ。そして、非嫡子ではあるが我が子なのだ」

「…そんなこと言つて、本当にクルトが女だったら貴方は政治の口マとしていたはずだ。

災難にも、顔だけは極上のあの女に似ているから、どこの男でも喜ぶでしょう」

「口を慎め、息子よ」

王子が吐き捨てた言葉を王は一喝する。  
なにここのいきなりのシリアス突入。ついていけないんですけど。  
そんな周囲の困惑はシカトで四名は話を続ける。

「でも事実ですね。

リシア伯母上は国一の美女だった。帝王学には興味がないのに権力  
が大好きで……ああ、クルトの父親は貴方ではありませんよ。」

騎士団長がそれに加勢する。

「何を言つてゐる、ラキアス」

「まさかご存じない、と?  
もしかしてクルトに王族の証があつたから自分だと?  
教えてあげます、クルトの父親は　「止めてください、ラキアス  
様」クルト?」

若鷹の言葉を遮り、兎が口を開く。

「王よ、私が巫子となつたのは自分の出自を知つていたからです。  
私は王がご存じだと思っておりました。」

「あれは女狐だからねえ…ま、普通は子供に実の父親の名前を聞いて聞かせて育てる、なんてありえないんだけど、相手を相当慕つていたようだし。」

王子が加える。

王の驚愕を観察して楽しんでいるようだ。なんて性格の悪い。

「…それで、相手は誰だ」

唸るように王様は命じる。

先ほどまでの感情が嘘のように冷え切った声色は、彼が一国の王であることを痛感させるものであった。

「お断りします。

クルトが嫌がつてますし」

「それに、頼み方というものがあるのではないか？」

私達が貴方をその椅子に座らせてあげていることをお忘れなく。

…別にいいのですよ？今この瞬間に、主を変えても

王子の軽い口調に、硬質な団長の声が加わる。

確信犯、ね。

魔王に狙われておきながら國を上手く纏め上げられなかつた王を『無能』だと称している、か。

それを直接的な言葉を使わずに言つなんて、腹黒の一乗としか思えない。

「だが、今現在はワシが最終決定権を担つてあるぞ」

「馬鹿ですか？むざむざ皇位継承権をもつ者を絶やすなんて。貴方に世継ぎを作る力はないんですよ」

「王子も貴方の血をひいていませんよ。

貴方が無理やり引き離したある夫婦の子供です。

ま、それでも王族の血は貴方よりも濃く、王にふさわしいですが。

「まさか、あの男が父親だところのか？！」

「何故嘘を吐く必要があるのです。はつきり言って、その方は貴方よりもその玉座につく正当な権利を有しています。……そうでしょう？兄弟殺しの、兄上」

「貴方は、私の母上が欲しかった。

最初に見初めた時、母上は既に貴方の兄の婚約者だった。秘密裏に兄を亡き者にして、彼女を得た。

でもね、母上は知っていましたよ。あなたが裏に居た、と。だから貴方に心を開かなかつた。一度きり臥所を共にしただけで孕んだことを不思議に思いませんでした？私が予定よりも早く生まれたのに、未熟児ではなかつたことを不思議に思いませんでしたか？

答えは、貴方の息子ではないからですよ。

いくらこの国が出産における治療に優れていたとしても、何も問題なく母体を傷つけず産まれてくるなんてありえません。知つていました？医者もグルだつたんです。」

楽しそうに、  
楽しそうに、  
亀は囁く。

父親の仇である育ての親を嘲笑う。

「お前など、産まれてこなればよかつた。  
知つていたら、目の前に今いなかつたといふのに……  
ワシを謀つた、その者らには後で処分を決めよ」

顔を青くした王に、わらうに若鷹は言い放つ。

「偽りの兄王よ、もう一つ素敵なことを教えてあげます。  
貴方は本来、その席に座る血を有していません」

「…何？」

「貴方は、母上の不義の児です。  
先代の王妃は一時期、帳に隠れた時期がありました。それは、渢わ  
れたのですよ。  
その十か月後に生まれたのが、貴方です。」

「「さて、謀りの王、これらを知つてもなお反論できますか?」」

亀と若鷹の声が重なる。

王は崩れ落ちた。

とつあえず一言言いたい。

お前らの話が国家機密す、さて、兎が男だつたことに驚愕できなかつたじやないか！

若鷹・亀王子へ老鷹を観戦する魔王様のみ（後書き）

その時の周りの反応

（巫女姫が、巫子皇子だと……？…）

「つまり男の娘か」

（皇子って、国王の調子じゃないの？…）

「まあ、鷹と亀だしねえ…」

（え、王も先代の王の子供じゃなーの？…）

「何」の混沌とした血液関係

もう三十年分は驚いたと思こますよ。聴衆の皆さん

（）せぎヤリコー、「」せ魔王様のシッ パリドす。

一つ伏線ひろい忘れましたが、次回に持ち越します。

実はですね、本当はギャグで始まりギャグで占めるはずだったんですよ。

でもね、恋愛に行けなかつたんだ。

若鷹が王様をロックオンした時点ですべてが狂い始めたんだ。兎の恋模様は次に持ち越しです。すみません！

魔王様よりお手紙を頂きました（感謝）

ジムーズが出ます。

遅くなつてすみませんでした！

## 魔王様はよつやく勇者として出陣します

あの素敵な暴露会見のあと、意氣消沈した国王（医務室連行）に変わり、亀王子がハイテンションで状況説明を始めた。それはもう割愛することにする。

すみません、外野のHPは一桁です。むしろMPかもしねない。

勇者パーティーを召喚するためには生贊が必要です

「よつし、騎士団長の了承も得た」とですし  
「してないぞ」

「空気読めこのＫＹが」

「一国の皇位継承権を持つ王子が国を留守にする」ことを、現状を把握して空気読めと言いたい。」

最近や、『空気読めよ』が普通になつてない？『KY』から始まる『日本人は空気読めます』というレッテル……。たしかに空気読めると対人関係とか楽だよ？でもさ、日本人全員に共通とか思わないでほしいんだよね。ああ、確か異世界召喚のラブやらギャグやらでは結構『空気読めよ』って主人公が思うんだっけ。むしろこの世界ではその発言を傍観してるんだー。

王子と団長が言い争っている中、つらつらとそつ考える。

「なら僕は行つても良いのでしょうか？」  
「クルトは…戦力にならないから無理だ」

『兎の自分を売り込む言葉に鷹は少し考え、小さく首を振った。

「なつ、僕は足手まといになりませんー。」

激昂する鬼に、亀は「いやとばかりに黙口だします。

「だつてさー、クルト攻撃魔法使えないじゃん」

「召喚魔法がありますー!王子よりも活躍できる自信がありますよ  
「へー、畜生じゃないか。今こいどつちが使えるか勝負しようか  
?」

どんどん靈廟の底しづなる|匂の会話に、鷹が一喝する。不憫臭  
がする。

「やめんか馬鹿ども。お前らが暴れたら」|Jが崩壊するー。」

「崩壊するくらい強いつてことでしょ」「

ハモる鬼と亀。よく考えたら、昔話ではここつり靈廟してなかつ  
た?…いや、かけっこか。昔話の動物同士の争いつて、子供には聞  
かせられない裏事情とか多々あるよね。異類婚姻譚とかさ。いや、  
むしろ古事記とかもRといえばRなんだよね。『欠けたところを余  
りあるところで塞ぎましょ』を女生徒に言わすとか、もはやセク  
ハラ…うん、黙りますね。

「城の老朽化を考える」

(やつちか…)

場内の皆さんが何とも言えない表情になる。数人は成程と言つた  
表情だ。経理担当の者は「ああ、そういうふうそんな時期か」と小さ  
く呟いた。費用捻出頑張れ。実はまだ戦時中だけど頑張れ。

…というか、

「老朽化しても、城であることに変わりはないんだから耐久性はそ  
こらの建造物より優れてるんじゃ…」

代弁ありがとう、見知らぬ兵士よ。

「そここの雷鳥の爪の騎士、兄上の部下ながらやりあるな！」

あ、やつべとこう様に慌てて視線を斜めに向けて『俺は知らない』  
ポーズを決め込むカワウソっぽい兵士（騎士）に、亀王子は親指を  
立てる。

「ジエームズ、貴様は後で話し合おうか」

くちばしを力チ力チと鳴らし、捕食者の眼をする若鷹騎士団長。  
カワウソは食べても腹は膨れないと思うよ。しかしカワウソとか何  
これ可愛いじゃないか。周りが猛獣コーナーに居そうな奴とか、個  
人的にあまり好きになれない動物の中、彼だけがその愛らしさによ  
り際立っている。かーわーいーいー。その隣で心配そうに表情を伺  
っているカンガルー・ネズミ君も可愛い。一匹とも無骨な武具に身を  
包んでいるといふのに、可愛さが伝わってくる。

「ねえ、ジエームズって言いつの？」

思わずカワウソに話しかける私。名前も憶えやすく、常識的な考  
えを持つ。…なるほど、勇者一行のお供にピッタリじゃないか。

「つはい、俺…いや、私は雷鳥の爪騎士団五番隊所属のジエームズ  
ですが…」

びくっと体を揺らし、恐る恐る返事をするカワウソ。うん、離れ  
たところからの若鷹ビームが怖いんだね。

ひとつひとと、笑顔で誘つ。気安く感じてもらうために、相手の方に軽く片手を置く。途端に潤む彼の瞳。

「田中ゴミでも入ったの？」

大丈夫だろうか。じつと見つめていると、どんどん青くなる顔。まるで血の気が引いたようという表現に最も適した顔色だ。その隣にいるカンガルーネズミ君がものすごく慌てた表情となる。持病か。同じ旅を共にする仲間の健康が心配だ。

「勇者殿、もしかして彼をこの旅に連れて行くつもりですか？」  
「勿論。何か問題でも？私と彼は良い相性だと思うから、一緒に居たい。」

主にツツ「ミポジショントしてな！癒しポジションて必要だよね。私の精神安寧上。カワウソ君の堅そうな毛皮をなめしたい。

「… そうですか。なら、ここにいる五人で行きましょう」

「りょーかい…………ん？五人？」

「ええ、私と王子とクルト、ジョームズと貴女 勇者殿です」

背後の兵士たちを下がらせる何かを纏つたラキアスが、ゆっくりとこちらに近寄る。なんでだろう、今すぐこの場からジョームズを逃がさなければならぬ気がするのだが。…うん、私の直感は八割がた当らないから気のせいだろう。

「それでは勇者殿、我々は荷づくりや引き継ぎなどもあるため、こ

れより失礼します。……ジーメズ、行くぞ」

硬直したカワウソを器用に引きずる若鷹。いつも思つんだけど、どうやって物をつかんでいるのだろうか。

会議はお開きだつていつし、そろそろ私も退室しますか。

決して亀と兔のコンビに話しかけられたくなかったわけではない。周りの騎士団たちが壁になつてくれて妨害してアイコントラクトで『逃げる』とか聞こえた恐怖心からでもないよ。…後で差し入れを持つていこう。

ああ、カンガルーネズミ君の名前も聞いておけばよかつた。彼にあとでジーメズの持病があるかどうか聞いてみよう。

お待ちかね（？）の人です

どもっす、ジーメズです。

只今、本来俺の仕事じゃないのに、会議場の警護を申し付けられてまーす。今日休みのはずなのにここにいるつておかしくない？  
「自業自得」

親友の一言が胸に刺さる。そつだよ、賭け事に負けるほうが悪いよ。すつからかんだよ。

「おこ、やれそろお偉方が集まる。…しゃんとじゅ」

ひつらに田を向けず忠告する親友。このクール美形め！

へいへいと軽く返事をすると、甲冑から覗かせる若草色の眼が、あきたように俺を見る。美形は滅びる。美形なのになんで俺ら親友なんだらう。…じいつ以外の美形は滅びる。

会議が始まった。しかし一向に進まない。

「会議は踊る…」

勇者様がポツリとつぶやく。誰も踊っていないのに、どういう意味だらうか。もしかしてこの進み具合のことを表現しているのか。勇者様の無関心を脇田に、王族たちの話がどんどんあらぬ方向へと進んでいく。いやまあ、自分たちで品位を落としていくのはどうでもいいんだけど、じいには王族に夢を抱いて就任している人たちもいるんだから、そりゃんよく考えたらビツなの、とか思つ。なぜこんなことを言つているかといふと、俺の母方の一族が王族と関係の深い者から酷い目にあわされた為に、国民の皆さんと比べて尊敬できないからだ。

自分でもそれは眼前にいる王族を恨む理由とならないことは判つてゐる。でも、血縁関係などを考えてしまつと、この感情は捨てられないのだ。

(とはいえ、恨んだとしてもどうしようもないんだけどな)

そう思い、考えを払拭させる。

思考が暗くなってしまったため、仕事に集中するこす。俺えらい。

「クルトは我が子なのだ…」

つておい、何があった。しかも巫女姫様じゃなくて『神子』…男だと…………？！

「クルトは貴方の子ではありますん」

王子、じ老体は劳わりましよう。そして王はそれをじ存じじゃなかつたんですね。じつからどう見ても、貴方の遺伝子を一ミクロンも受け継いでいないじゃないですか。眼の色こそその人と違いますが、その色もあなたとは異なつてますよね。先祖がえりとか、貴方の血ではおこりえないですよね。

更に王子も貴方の子じゃないんですか。それは知りませんでした。とはいっても、甥ですからまあ…ええええええええええええええ、やめて、そんな国家機密語らないで…………俺ら兵士はまだ死にたくない！口封じとかマジしないで…

どうすんの？！ねえどうすんの、王の血をひいてないのが玉座に座るのって、僭主とかいうんじゃなかつたっけ。・・・え、違う？まあとにかく、

「王が倒れたぞー！」

救護班力モソ！

あつれー、会議つてこんな国家機密を暴露するようなものだっけー？俺わかんなーい。

若干の休憩をはさみつつ行われた『勇者一行の旅に誰が行こうか』

の会議。

不用意な発言により、強制参加決定。  
よい子のみんな、口から出た言葉には気を付けよつね（経験者は語る）

### カンガルーネズミの胸中

俺に親友のジェームズは、運が悪い。それは彼の一族特有の物らしく、対象は王族にまで及んでいる。過去に彼の母親がその被害にあつたそうで、彼が今今世に誕生していることが奇跡としか言いようがないとか。

そんな状況に陥つたのは、王族の不手際としか言いようがないらしい。

とはいって、何か起きたら王族に頼るというこの国のスタンスは少々おかしいのではないかと思う。解決する側は必ず王族側の人間が行う。国王制の基盤が揺らいだら、この国の善悪は歪むのではないだろうか。「正」を声高に言える権利を持つものが揺らいだら、その「正」までも効力を失くしてしまう。「正」を唱えられるのが一団体しかいなきことも、この国を破滅へと至らすきっかけになるだろう。

『不手際』は、王族のせいであるが、そうなつたことの全てに彼らの責任が問われるわけではないのは判つていて。

それでも思わずにはいられないのだ。『彼らが止めてくれれば』

と。実際、彼らはそのことを把握していた。証拠不十分で止められなかつたと語つていたが、された側としては許すことなど叶わない。直接関係ない者同士であつても、そういうつた確執は産まれてしまつ。きつと彼らが当時を振り返るなり、こう思つてゐるだらう。

『ハッピーハンドには犠牲が必要』だと。

それは正しいし、否定できない。

『誰もが幸せになれる』

そんなおどき話ですら存在しない。

敵も、味方も、第三者も幸せになれるだなんて。  
それは認められないし、認めたくない。

でなければ、あいつの状況を説明できない。

だから、いつなつたのではないか。

王族三名の漫才にツッコミを入れる<sup>ジョームズ</sup>アイツ。  
勇者殿から興味を抱かれる<sup>ジョームズ</sup>アイツ。

「Jの旅にウェルカム」

ウヘルカムつてなんだろう。ああ、強制連行のことか。

勇者殿、『カワウソ』つてもしかしてジョームズのことですか？  
あいつはどうちかというと、今巷で人気の『ハムスター』なるもの  
にそつくりですよ。あの狭いところに入りたがるといふとか。  
ああ、ジョームズの顔真っ青になつてらー。

とりあえず頑張れ。

親指をぐつと立てたらジヒームズに睨まれた。なんでだ。

「え、持病ですか？特に俺は聞いたことがありませんが……ああ、必要以上に王族の方々に近寄らせないようにしてください。それだけです」

## 魔王様はよつやく勇者として出陣します（後書き）

ちょっとブラックなので、読み飛ばしたほうがいいかもしれません

今回何を言いたかったかというと、

「誰もが幸せになれるなんてありえないんだよね」ってことです。  
最近読んだ「なろう」さんの小説で、ものすごく気に食わない終わ  
りだったんですよ。誰もが納得している終わりなんです。

内容が、というより心情がおかしい描写が沢山あって、「これが幸  
せ」だと思い込んでいるようにしか思えないんで、読んでてイライ  
ラしました。

三角関係になつたのは判りますが、『「私の」夫』とか、何度も入  
れんな。お前が奪つたんだろ、被害者面すんな、そういう状況に陥  
つたのは、自分の浅はかな行動のせいだろ。根本的に「正」を間違  
えてる。とかね。作者さん、書き直したほうがいいですよ。ここ  
でこそっと呴いてみる。

いやね、私優しくないですから、『ここをこうしたほうがいい』と  
かあまり言わないんです。本人を傷つけてめんどくさいことになる  
のとか嫌いですし。「これおかしいんじゃない」メールを送る時間  
とかもつたまいでし。時は金なり！

・好きな作者さんには、こつそり評価点入れたりとかしてますよ。  
たまに感想とかも送らせていただいてます。

なんか黒いあとがきになつたなー・

ひとつにおいては、長編とかのジャンルでもないので、短編集的な

感じで好き勝手に書いてますが、白黒はつねつねかいて書いて思つてます。

普段あまり書かないよつこに書いてるので、といふといふ文章がかしくなつてるのはそのせいですとかせやることある。

魔王様せぬいぢやへ櫻痴ひつて玉壇つもつた（温書也）

今回よ聞こだす。やして叫めに投下でももした。やつはーこー<sup>一</sup>途由で「みーつ・・・・・・」となつやうだ。

## 魔王様は勇者として出陣しました

「あと少しで魔王城に到着だ。皆、油断は禁物だ。  
気を引き締めて行こう！」

「ここにはまだ如何お過いしてしまったか。このたび、勇者ポジションが付  
加された魔王です。  
只今、同族狩りに駆り出されています。

もはや誰が勇者だ

普通、仲間を鼓舞するのは勇者の役目かと存じ上げますが、この  
パーティでは亀王子がその役目を担っているようです。私としてはリーダーシップをしたくないのでどうでもいいですが。

そして一度目の自己アピールですが、もふもふ分の足りない魔王です。決して『勇者』ではありません。ええ、RPG勇者ゲームで必ず主人公に苛つとしていた私が勇者なわけないじゃないですか。クールイケメンキャラにキャラ崩壊上等で『きやあきやあ』してましたが何か。熱血とか、うじうじしたのって嫌いなんですよね。ほら、主人公って一番心理描写されるじゃないですか。どうせなら無口キャラとか、そういうたキャラの心理描写がいい。きっとうじうじしてないだろうし。…え、偏見？きっと『思い込み』ってやつですよ。その葛藤が魅力の一つと言わてしまえばそれまでなんだけど、好みって人によりけりだし、とか言い訳してみる。

とまあ、私が勇者ではないと「勇者様、そろそろ作戦会議をし

たいので……違つんだよ」<sup>トコトコ</sup>これは……そつ、あだ名なんだ。

「お主、そろそろ現実世界に帰つてこい」

バニー巫子がぱしーんと私の頭を叩く。その手にある扇はどうから出した。

「クルト、何で女装してるの?」「今更だなさい!」

カワウソ・ジョーモズが叫ぶ。<sup>ツッコム</sup>いや、だつてねえ?扇はそういうものだとしておくにせよ、女装…否、巫女服つてどうなのよ。

真っ白でふわふわな毛皮を淡い水色の R P G ゲームに出でくる巫女さんが着ているような絹で隠している。両袖にはぐるりと紐が通してあって、それに銀色の鈴がついてる。動くたびに軽やかな音を立てるそれは、魔よけの役割も担っているとか。

なかなか鋭い爪のある指にはどうやってついているのかわからないけれども指輪がついており、さらに手首には纖細な模様が施されたバンブルを嵌めている。巫子の衣装だけで豪華な屋敷が一軒買えるとか、この世界において彼が重要な役割についていることを知らしめるのに十分だった。宗教の権力凄い。

そんな宗教権力の強い神殿がどうして国王一家に跪いてはいるが服従していないかというと、彼らの崇める神が王族の守護神の子供だからだそうな。『え、それだけ?』と思わなくもないが、これがまた重要なことだと。

もしも神殿で崇めているのが王族の守護神だつたら、神殿は王族に服従していると採れる。王族のために存在する宗教だと。つまり神殿の代表者は王族しかなれないことになってしまつ。

この世界は私からしてファンタジーであるから、神殿に使えるも

のしか使えない能力がある。

じゃあその能力を王族が所持していなかつたら？  
となると、『神殿』<sup>スキル</sup> 神聖な力<sup>スキル</sup> の構造が崩れてしまう。

そもそも、神官になれるのは 特別<sup>偶像視できる</sup>な力が必要であり、それには身分も何も関係ない。この力は突発的なもので力を持った者の子が必ずしも力を得ることはなく、神殿内には親の身分が多種多様である。神殿内において親の身分など関係ないが、事実であるために皆淡々とそれを口にする。敬つてほしいわけではないが、聞かれだから只答えるような、そういうた態度。

ただ『国民である』この条件を満たしていれば、力持つ者なら誰でも神官になれる。もちろん拒否も可能である。しかし力を持つた彼らは希少であり、給与も普通に働くよりも多くの金を得られるとあり、基本的に歴史上の数人を除いて辞退する者はいないそうだ。

この世界は、宗教と王権の分離が基本的だ。宗教は政治に関われないのは周知の事実であり、それを破る者は死あるのみ。

この世界における宗教は民衆のよりどころであり、一種の医者の的な役割である。神官の持っている特別な力とは『医学では治せない怪我や病』を直すための力であり、逆に『医学で治せる病気や病は、特別な力では癒せない』という。だから神官は誰も驕れない。驕ればその矛先は自分に帰つてくる。自分が怪我をしたとき、病を得たとき、誰も助けてくれないので。それは死ぬまで続くという。

その神殿の中でも狸の次に位の高いクルトは、出会つた時からずっと女性ものの衣装を身に着けていた。色々なバリエーションがあるけれど、色とかは全部同じ。装飾品とかで印象を変えるとか本人は言つていた。

「『』の格好か？これは戒めだ。

私は一度と還俗しないとい、な……」

シリアスやめて。これはギャグなのよ。小説タグにおける『過去に影』みたいな話とかやめて。それ確実にヒロインの相手役とか、恋愛陣の定義だから。それに女装が戒めなんて聞いたことがない。

(『』の話に恋愛を求めてはいけません)

恋愛…ああ、そういうえばクルトが前に若鷹に恋しても無意味とか言つてたよね。それってつまり、一重苦の恋に苦しんでるかい？！

「……クルト、私は応援する。

たとえ生涯独身を貫かなきやならなくとも、相手が同性でも、好きなものは好きなんだよね！」

「一遍お主の頭を覗かせてみてくれんか？……大丈夫。痛みは一瞬じやから」

「さわやかに殺害<sup>サムライ</sup>す出れないでください！」

真顔のクルトに愛らしくカワウソ<sup>カワウソ</sup>が叫ぶ。しかし兎はシカトし、私に声を荒げる。何故だ。

「そもそもな、相手が同性つてどういうことだ！」

「いや、だつてクルト前に言つてじやん

「言つわけなかろつ！」

「自分がいるから騎士団長に恋しても無駄だつて。」

「どんな解釈したらその思考回路になるんだ？！」

「ねえ、それって前一人が逢引してた時のこと?」

亀が会話に加わる。

あのさ、私の野生の勘が貴方様に近寄るなと言つてるんだけど、どうして?いやね、ジョームズも『やばい、あれはやばい。喰われたくなかったら勇者様は一人きりにならないほうがいいです!』とか言つてたんだけどね。私はかわいい子の味方だから必要以上に近寄つてないけどさ…

「逢引つて……それって知人のいないところでするもんでしょう。どう考へてもあそこはそんな場所じゃないですよね」

メイドさんとか、城で働いている人や貴族の方などが通る渡り廊下（1F）だった。

「だつて、男と女が一人きりで熱く語らつてるんだよ?これのどこが逢引じゃないっていうの?」

「まず、私とクルトにそういうた男女の関係を求めないでください」  
恋愛

兎と恋愛はごめんだ。観賞用としては好きだが、尻尾に蛇が生えているし、なにより種族を超えた愛つていうのは御免こうむる。もう贅沢は言わないから、地球人と結婚したい。「国際結婚?遠慮こらむ」とかもう言わないから、せめて地球人がいい。

そもそもさあ、クルトってかなりの美少年なんでしょう?なら相手はより取り見取りなわけだし、彼らからして『異世界人』という価値しかない私に恋愛感情を抱くのって、ありえないし損しかない。自分たちの常識を全く知らない女のどこに惚れる要素があるのか判らない。「初々しい」所、と言われたら、その世界の生娘はどうなるのさ、と思う。『姿かたちが珍しい』だったら、それは私を人間としてではなく『観賞用』としての価値しか見出してない、ってことだよね。

「男女関係を一つの形しか知らないのって、王子は悲しい人なんですね」

私の内心の変化に、王子は片眉を上げた。  
でも、私は自分の考えを撤回しないし、したくない。一人で話しあから恋人だ。ご飯を食べに一人で行ったから恋人だ。  
いうのって、かなり失礼なことじゃないかな。  
男女関係って、どうして恋愛としか結びつかないんだろう。上司と部下の関係とか、友人関係とかあるじゃないか。

「じゃあ、君が教えてくれるの？」

亀王子が私の眼を凝視して呟く。ちょっと近くありません？

「今の関係がそうじゃないですか。……勇者パーティーの仲間でしょ？」

この旅が終わっても、この関係は変わりませんし

「そう、だね……」

亀の声が小さくなつた。

ちょっと離れたところでのカワウソと若鷹

「俺、アレ知っています。フラグクラッシュヤーっていうんですね  
「フラグ？」

「恋愛におけるきつかけみたいなやつです。今巷で人気の恋愛シユ

ミレー・ショングームにおける特殊用語です」

「何故それを知ってるんだ…？」

「俺の親友がそれ好きだからです。『三次元より一次元の嫁』とか言つてました」

「あの顔でか：人は見た目によらないな」

「俺からしたら残念な美形ですけどね。」

：団長は勇者様とフラグたてに行かないんですか？」

「私の場合は恋愛感情じゃないからな、どっちかといつと主従関係と言つたほうが正しい」

「残念な美形がここにも！」

：ていうか団長、確か騎士団の就任式で『国のために戦つ』とか言つてしませんでしたつけ？！」

「大義名分て大事だよな。……本音の隠れ蓑として」

「国家に背くとか本気でやめてください！」

## 魔王様に戻ります

この勇者一行のおかしなところは、イベント總スルーで魔王城に向かっているところです。

王子に聞くと、『そんなことやつてる暇あるわけないでしょ。迅速に根源を叩き潰さなきやね。少数の人間と世界の人間、どっちをとるかなんて考えるまでもないよね。』

冷たい発言だなあと思つていたら、若鷹が詳しく説明してくれた。

そういう村の願いつて魔物討伐だから、一匹ずつ倒すよりも頭を倒したほうが早いという。魔物は魔王の力の一部だから、魔王を倒せばいなくなるという。水道の水が流れいたら元栓を閉めましょう、という原理か。それにしても王子の言葉は酷い。

というわけで行路省略して現在魔王城です。クルトのテレポートでやってきました。王城からテレポートで行ける範囲まで、というよつこした結果、魔王城の入り口付近に着地完了。結界が張つてあるらしく、最終決戦の場にビーン！と現れることはできないという。それはそうだよね。

てなわけで城の入り口から侵入開始で、只今中間地位かな。後残すところ魔王のみ、という立場によつては「この賊め…！」と歯ぎしりしたくなるほどの快進撃つぱり。私は全く戦つておりませんが。

主に王族たちが戦つてゐる。ジエームズは私と一緒に後方支援という名の見学者。

そうして魔王退治人間の侵略が、ハジマル。

本当は、こんなことしていいのか判らない。

周囲に嵌められたとはいえ、結局は自分の意志を持つて『魔王』となつた私が、このセカイの『魔王』を倒していいのか。

だつて、私に何の関係もないのだから。

都合

情報

私が得られたのは人間側からの情報で、魔王側の都合は一切ない。私が存在を認められた世界での人間たちも、魔族側を自分たちの情報で決めつけて隙あらば滅ぼそうとする。

確かに、私たちの中には人間を主食にする者もいる。それは肉であれ血であれ精であれ、食べていることに変わりはないから、言い訳はしない。

でもね、少し考えてみてよ。

貴方たちだつて私たちを食べるじゃない。

人魚は、不老不死の靈薬として

ドラゴンは、貴方たちの身勝手な薬の一部や家畜として

ダークエルフは、貴方たちの慰み者として

貴方たちに喰われているじゃない。

これのどこが私たちと違うというの？

人魚は人を惑わす？

貴方たちは知らないでしょう、彼女たちは海を慰めているのだと。彼女たちの歌なくば、海は荒れ別の大陸へ渡ることさえ出来はし

ない。

陸の生き物を守っている彼女たちを、ビリして食べることができ  
るの？

ドラゴンは凶暴？

彼らは理知的で、自分達を辱める者にしか攻撃しない。  
貴方たちは誇りある彼らから報いを受けているだけ。

仲間を家畜馬めいわくにされたドラゴンの怒りを受けるのは当然でしょう？

ダークエルフは悪？

彼らが何をしたといつの？

ただ彼らはエルフたちとは異なる風貌と文化があるだけじゃない。

それなのにどうして貴方たちの 奴隸おやぢり にされてしまつの？

それでも私は言わないのだ。

これは私が新たに存在を許された世界における事実。  
この世界では、まったく異なるかもしけないから。

これ以上関わってはならないだらうから、もう帰りたい。

一度の記憶の欠落を、もうしたくないのだから。

だからもう、サヨナラしたいのだ。

この世界に私の居場所が作られる前に。

## 魔王様はよつやく勇者として出陣しました（後書き）

しつぎれとんぼ！

なんかですね、後半は魔王様の、「魔王」でいられる世界の迫害される存在の説明です。

立場によつては「正しい」とだが、逆の立場の人からすると「正しくない」とになりますよね。

「正しくない」からとこつて、「間違っている」訳ではない」ともありますが。

そんな矛盾…いや、迫害されてしまつた側の実態を知つてゐる魔王様が、「魔王」の世界でのことを思ひ出して語る……つていうのが今回です。

「言わない」のが、魔王様らしさですよね。

彼女は『関わらない』ことを主軸に、「勇者」の世界で生きよつとされています。

だから、「勇者」の世界では何も学ぼうとしないし、理解したくない。だつて、理解してしまつたら、いじに「存在する居場所」を求めてしまいたくなるから。

逆に、「魔王」の世界では学ぶし、理解しようとする。

もう「存在する居場所」が無くなり、「その世界しか受け入れてくれないから」

なんだか若干ねたばれつぽくなつてしましました……まあいつか。しかし初期の軽さが消え失せてしまったな…どんどん重たくなつてくる

……本当は一人の会話で終わつてたんですけど、なんだか物足りなくなつてしまひ。こんな長さに。

後悔はしていない！

長い方が好きな人への、感謝です。  
短いのが好きな人はごめんなさい！

# わん（前書き）

しかも中途半端です。

「わん」はone···1です。

犬の鳴き声ではないです

魔王様つかち魔王あんじ勇者ぱーていー わん

やつてまいりました魔王城の魔王の間……へ続く扉の前。  
RPGにおける最終決戦 ラスボスじゃないよ、第一段階だ  
よ という状況にあります。

勇者な魔王様はラスボスな魔王と対峙します？

どうも。多分この世界で一番の傍観者な魔王こと悠です。…絶対  
私の名前を憶えてる人って少ないよね。

十分な休息(シッコリ)の時間をとるために扉の前に立ち廻りしていた私たち  
は、最終確認をとる。

「基本的には勇者様とジーロームズは何もしなくていいです」

後方支援という見学ですね。

若鷹の言葉に、私とカワウソは無言で首肯する。だって痛いのき  
らいですもの。しかしカワウソは若鷹に苦言を呈する。

「……いや団長、俺一応騎士なんですけど。

更にいふと、何かあつた際に身分の高い人の盾になるのが仕事なん  
ですけど……」

「お前は魔王戦に使えん」

「ハツキリ言わないでくださいよー！」

まあ、生存率が高まるのだから大人しく守られてればいいんじゃないかな。騎士としての馬鹿らしいプライドがあるのなら、まあどうぞ生存率の低い戦いに挑んでください。

「だつてさ、ジムズ」

おいで王女、

「……私今、口に出しました?」

「『騎士としての馬鹿らしさ(略)』と書つておったが

「わあ、乙女の贔みにかけひやつた

…おこしゃり、何も聞きませんでしたところまでは四線をあわつて  
の方向にするな

特にカワウソ…

「そんなとこりも素敵です

「だまれ変態。」

若鷹が恍惚として書つ。だから私鳥類愛好家じじゃないから。

「ラキウス殿を変態と呼称するのはお主だけだぞ…」

「変態以外に何と呼べと?」

「普通に名前とか、おしゃめに『下僕』とか…」

「やつしてぐださー」

亀のふざけた言葉にキリッとした顔で下僕と呼んでくれという若鷹。だれかこいつをどうにかしてくれ。

「クルト、未だに兄上の性癖を判つてなかつたんだね…」

「確かに王子だけしか知らなかつたと思ひますけど？！」

「ジーモズの言うとおりだ。私は勇者殿しかこのような気持ちを

「力がない！」

「なんといふか、憐れよの…」

なら止めろよ、矯正してやれよ。とは言えなかつた。そして若鷹、答えになつてない。

「つーか俺ら、最終決戦の場にいるんですから、こんなコントみたいことしてん場合じゃないとと思うんですよ」

カワウソのもつともな意見に、一同沈黙する。

「確かに相手を待たせるのは失礼に値するな」

兎は寂しいと死んじゃいかね

「お主らの觀点がおかしい氣がするぞ?」

上から若鷹、亀王子、鬼巫女の会話である。王族つて、ろくなのがいないな。バニー巫女は細かく言つと王族ではないのでカウントしない。そして亀王子よ、なぜ鬼を例に出す。

ツツコんでいいのか判らないこの状況で、カワウソは早くこの旅を終わらせたい理由を語る。

「それに俺、帰つたら兄貴の結婚式に出席するんだから、ひとつと帰りたいんです…」

「これぞ脂肪フラグ」

「セルロース違う。死亡フラグ」

「あんたら失礼すぎるな、おい！」

亀の言葉に私がツツ「口みカワウソが叫ぶ。

仕方ないじやないか。一発変換で最初に出てきたんですもの（b  
Y作者）

「いや、むしろ死亡」フラグを何気なく口に出すお前のほうが悪いだ  
ろ…」

「隊長の裏切者……！」

「味方になつた覚えはない」

カワウンは撃沈する。といふか、この世界にも『フラグ』なんて  
あつたんだね。（魔王様は若鷹とカワウンの会話を聞いてません）

「いいよ、俺の味方はあいつがいれば十分…」  
親友

親友って、カンガルーネズミ君のことだらつか。そしてジエーム  
ズよ、このまま新たなる世界の扉を開かぬよつに生きりよ。勘違い  
してしまいそうになつたじやないか。よかつた、この田のオプショ  
ンがあつて。

ちなみにオプションは、自分に対する好意を除く、その他すべて  
の感情が靄がかつた色として目に向る。恋愛感情はピンクです。つ

いでに黙つと、ジョーモズからは友情の色しか見えない。

「え、君ら出来るの？」

「この亀が！私の内心の罵倒を知つてか知らずか、ボーアズトークが始める。

「俺とアイツは親友ですが。というよりも、あいつの恋愛対象は画面上の女性（うつふんあつはん系）なので、俺と奴の蜜月が生まれるわけがありません。ええ、絶対に。」

「そこまでマシントークされると、逆に怪しいぞい。ほれほれ、吐け」

「まあ、子供なら養子をとるところ手もあるからな。自由恋愛してもいいぞ。ただし、勤務中には控えることが条件だが……」

「もつヤダこの王族！」

「ついして最終決戦の扉一枚隔てたところの会話はジョーモズをいじる」と、男性陣は燃えていた。  
「まつち寂しい。

「「「お邪魔します」」

よつやく部屋に入室しようとすると、鬼を除く男陣がそのまま

つた。

「何を言つておるんじや？！」

「え、やつぱり知らない人の居住区と言つたら挨拶が必要でしょ」

「そうですね。俺も母さんに叩き込まれました」

「ほう、いい母上だな……クルト、身分があつても礼は大切だぞ」

上から鬼・亀・カワウソ・若鷹の言葉である。

「え、我が間違つてあるのか？」

「いやクルト、奴らの神経が図太いだけだよ……」

そもそも礼節以前に、私たち魔王城に土足で無断侵入してゐるからね。

「何で今回の勇者は変人揃いなの？」

おいまた、なぜそこで一括りにする。

振り向いた先にいたのは、大きな玉座に鎮座する……黒い球体

仮面

。

+ 靄がかつた物体の、仮面の目の位置に当たる部分はこぢらに向いている。そして再び玉座から私たちに問い合わせた。

「今回の勇者は、誰？」

その言葉に、4人の視線が私に降り注いだ。待て、私は勇者なんて認めていない。

「そう、あなたが…………つ？ー・ビツヒー、あなたがこの世界にいる？！」

黒い靄が驚きの声を上げた。今更だが、魔王が黒い靄でも私は驚かんぞ。むしろ予想してた。……大丈夫、魔王＝美形なんて構図、自分で破壊してるし、この眼のおかげで美形ウォッチングできないつて知ってるから。あれおかしいな、涙が出てきたよ。

黒い靄・・・以下魔王にしよう。魔王は、私の存在に気づいてるみたいだ。じゃなきや…ねえ？テンプレっぽい発言しないでしあうし。

魔王に私は立てた人差し指を口元にあて、黙つておくよつにジエスチャーする。相手は判つてくれたようで、それ以上の詮索はしないでいてくれた。だからまあ、理由位は伝えるべきかな。

「いわゆる、成り行き上。」

「そう、なら仕方がないのかな。あなたの存在は、この世界でも異質なんだね」

うん、そうだ。私はこの世界でも、元の世界でも異質だろうね。  
前<sub>人間</sub>の世界で許容されていた私が次の世界に落ちたとき、異質になつてしまつたのだから。でも、それはもういいのだ。私という存在を求めてくれたのは、その世界が最初だったのだから。前の世界は私を認めてくれた。でも、離さないでくれなかつた。そうでなければ、私が月竜国という国でトップになどならない。その世界に落ちてきたりなどしない。最初の世界よりも、次の世界のほうが私を求めてくれなければ、そんなことは起きない筈。

「何故あなたがこの世界に関わる？」

「うん、私もそう思つ」

彼の言つとおり、私がこの世界に関わる義理はない。関わりたくなどなかつた。

それでも、関わつてしまつた人がいるのだ。  
彼らの生活を脅かす存在が悪意あるものであるならば、私はこち  
ら側につかなければならぬ。

私の想いをくみ取つてか、彼は逡巡するよつに瞬いた後、私に告  
げた。

「じゃあ、あなたにはこの戦争のきつかけを知るべきだね  
「人間と魔族の争いだけじゃないの？」

彼は一瞬酷薄そうに搖らぎ、多分嗤つたのだと思う。軽蔑の色合  
いだつたから。

「巻き込まれただけのあなたに昔話をしよう」

「ある魔族の娘が人間に殺されました。それも、ただの暇つぶしと  
いう名の最低な理由で。

その娘は、もうすぐ結婚するはずでした。実は彼女のお腹の中には  
子供もいて、それは娘だけの秘密だったのです」

魔王は言葉を区切る。

「そして、全てを知つたその夫となるはずだつた魔族は人間を恨  
みました。」

「その後、魔族を殺すことに快樂を満たした人間たちは、何人も何人も魔族をとらえては殺しました。それは実験・家畜としての扱いなど広範囲に渡るようになりました。そうして、人間は今度は別の魔族の娘を捕え、殺しました。

彼女もまた、婚約にある身でした。魔族の中でも高い地位にいる男と結婚するはずだった彼女は、清らかな体を持ち、その身を初夜に捧げるつもりでした。」

「そうして、彼が救い出したときには、彼女は身も心も壊れていました」

「体が人と同じであつたときは慰み者として体が元の姿になつた時には食物にされ。少女は、神聖な生き物だつたのです」

「『清いから穢したくなる』

彼女は、そういう性質をもつた魔族であり聖族だつた。人間はね、綺麗なものに一つの感情があるんだよ。

『汚せないほどの美しさ』と『汚したくなる美しさ』のね

憎しみを籠め、彼が呟く。

ああ、貴方だつたんだ。いとしい人を失くしたのは。人間側が沈黙を守る中、彼の言葉は続く。

「先に害を加えたのは、人間だよ」

それでもあなたは人間のために戦えるの？

「私は、はつきり言つてこの世界に関係ないよ。でもね、不本意なことにかかわらざるを得なくなつてしまつたんだよ。それも魔王退治とか言つ名田のせいだ」

そのきっかけを作ったのは、貴方だ。でも、そうさせたのは人間で、

ああ、結局誰が悪いの？

逡巡する私を見つめ、彼は声を響かせた。

「もしあなたがこの世界を恨んで居るのであれば、僕の隣に来ない？」

「ふらむ？

世界から切り離されたことを？

そんなこと、もう一度曰くだ。一度曰よりも怒りは少ない。この世界で誰が正しくて誰が正しくないかすらわからないのに、元に選択をさせるの？

ぐるぐるする。

気持ち悪い。

吐き気がしてきた私の思考回路。そんなとき鼓膜に、涼やかな、でも怒りの混じった声が入り込んだ。

「断る。」

その誘いに否をと答えたのは若鷹であった。

「彼女はお前の隣になど立たない。」

「何故、君が決めるの？君は彼女と関係ないでしょ？」

「関係ある。俺にとつて、大切な……

『主人様だ！』

「どーん、という効果音をつけたくなる見事な『王立ち』。場内は無言に陥る。

……。

「『』の方の隣に立つなんて、そんなお『』がましい事を考えるのは罪一むしろ下に跪くのが道理であり喜び！」

「ねえ兄上、もしかして勇者様の立場が変わったら兄上の立場も変わること？」

「立場？変わらんぞ。」

「俺の立場は勇者様の配下だからな」

亀が『』にこつまじび『』とこつ顔をした。鬼は『どうすんの』という顔をこちらに向けている。どつもできんよ。できたらとつべのとうにしてるよ。むしろ私は今までのシリアルスピリチュアル

て顔したいよ。

そんな中、空氣の読めない魔王が疑問の声を上げる。

「じゃあ、勇者が来ると貴方もついてくるハシヒトヘ。」

おこの世界の魔王、特売品じゃないんだから。  
まるでお得プライス 頃間のトレフォンショッピング、と言わんばかりの空氣。

「勿論だ」

「勿論なのー?」

お前ふざけるなよ。このシリアルスシーンぶち壊すとか、おバカ要員じゃないでしょ? が。

「たいちゅおおおおおーあんた國家への誓はぱいすんですかー! 反逆者として捕えられますよー!」

カワウソが悲壮な声で叫ぶ。強く生きる。

「俺は勇者様のために生きるーそして彼女の下僕になるんだ。って  
わけでいい加減認めてください」

誰かこいつにかしてくれ。

もうやだ、せっかくのシリアルスシーンをぶち壊されたし。つーか  
こいつ、マジ? マジなの? 変態なの?

「あはは、兄上ったら欲のない人ですねえ」

「思いつきり私欲にまみれると思つた? !」

亀の朗らかな笑みに、兎も叫ぶ。  
おかしいな、ボケ：ツツコミは2・3のはずなのに、カオス具合  
が收まらないよ。

魔王様つおひち魔王あんじ魔者マーていー わん（後書き）

すみません、分割します。  
たぶん次回は近い方に掲げられるのではないかと。（次回は「つ  
ー」です）  
お気に入りが減つて増えて減りました。  
なんというか、すみません。  
書く気力とか時間をなくしてました。  
今は少しだけ戻ってきます。  
ほんとうならこれで勇者編は終わるはずだったんですけど、ね・・・  
ドンマイ！

勇者編が終わったら友人が作ってくれたキャラとか出したいなあ^  
^

魔王様つまづち魔王&魔者ぱーていー つー(前書き)

なんかもつこらこらあつまして、書けませんでした。短くてごめん  
なさい。

魔王様「おつち魔王&勇者」ぱーていー つー

「今回の勇者たちは駄がしいねえ」

顔面（多分）の仮面をもてあそんでいた魔王（なんだかゅうらゅうと揺れていたから）は、そのまま仮面を外す。体の一部じゃなかつたんだ。……すると途端に静まり、息を呑んで魔王から視線を外さない仲間たち（若鷹のぞく）。どうしたの？

「魔の者はその姿で人を籠絡するというが、本当だったとは…」

# 亀王子が呟いた。

……つてことは、またかよ！

「まさか美形？」

「美形なんてもんじやないです。第一王子が見劣りするほどいのレベルです。あ、でも団長と競つてるかんじ……つて、勇者様見えないんですか？！」

おつよ、カワウン。もはや慣れっこだよ。

「どうか、亀王子の顔を見たことがないから判断がつかないんです。そして若鷹は残念な超絶美青年だったんですね。人外レベルのご尊顔をお持ちだったんですね。」

三人が黒靄の美貌に釘付けになつてゐる中、その超絶美形は何を  
しているかと言えば……あくびを凝らしていた。・・・こいつが他  
人に興味が欠片もないのがよくわかる。この調子で私への興味を失  
してくれたらいいのに。

三人の凝視に居心地が悪くなつたのか、黒靄は身じろぎをして「こままじや埒が明かなぞうだから」と黒靄は（推定）指先をちょいちょいと動かす。すると途端に視界が遮断された。全体が薄紫色のドームに引きずり込まれるような感覚。魔王の間から隔離されたのかな。遮断される寸前、獣たちの焦つた声が聞こえた気がした。

「何これ。勇者パーティ獣四人衆は？」

おおよそ見当はついているが、社交辞令として一応疑問符を出す。空気は読めます。

「とりあえず空間を遮断してみたよ。魔王同士の会話には、他者は存在しないほうが好都合だからね」

ああ、やはり。  
彼は私の存在に気付いている。

私の様子など意に反さず、彼は言葉を続ける。  
嫌だな、と純粋に思う。自分勝手なのは嫌い。

「よつこや、月竜国を統べる王。

こやは黒竜国。そして僕は黒竜国を統べる王。」

「黒竜国？」

聞いたことがない国名を言われ、戸惑う。『竜』とつくからには、一度目の世界に属する国かもしれない。私の国を知っている事からも、その線は濃い。だが、歴史を学ぶ上では一度もその名は出てこなかつた。

「あなたは新しい魔王だから知らないのも無理はないね。  
僕の国は、二つの世界をまたがっているんだ。そういう国はほかに  
もいくつかあるよ」

全て判つていてと言わんばかりに頷く、彼に対する不快感は最高  
潮だ。

偉そうに彼が語った内容は、このよつたものであった。

まず、彼の国は建物における階段と階段の間の空間　　踊り場  
みたいなものだそうだ。月竜国が一階で、人間の国が一階としたら、  
黒竜国はその階段の中にある。階段の上の踏み場は狭いから、踊り  
場のような階段と階段の間の空間に彼らの国が存在する。

「色つきの国は全部そういう立場。僕が確認できているだけで他に  
は赤・青・黄・緑の四つかな」

「とにかく、現存する国に沿つた色の様な気がしますが。  
黒つてことは、月の出でいる夜のイメージだし。

「多分気づいてると思うけど、この国は君の国とつながってるんだ  
よ。」

赤竜国は火竜国と  
青竜国は水竜国と

それぞれつながっている。

ああやはり…とか反応すべきなんだろうか。

あまりにも関心の薄そうな私に、魔王はちょっとじょんぼりとし  
た。だって予測できるし。でも、一応気になることがあるので彼に  
質問する。

「つまり、私の世界移動は貴方の国を経由したってこと?」

「それは半分違うんだよね。君は世界を移動していない」

意味がわからない。

私の世界に、若鷹とかがいる国なんて存在しないし、ましてや『召喚』なんぞといつふざけたものに引っかかるはずなんてないだろう。じゃなければ、なんだ。私の国と彼の国が同じ世界にあるとうのか。

「この世界はね、二重構造になっているんだ」

ああ、なんてふざけた世界。

思わず噛み締めた唇から、鉄の味がする。だからこそ、階段を用いた国の配置の説明だつたのか。

私の反応に何を思ったのか、黒靄は自分の役割について語りだす。

「人間・魔族両方の侵攻を止めるのが、色持ちの仕事。

・・・・・とはいっても魔族側の侵攻なんて、そこに行くまでに他の魔族に敗れるのが常なんだけどね」

「もしかして、自分たちの世界を統一してから人間側に侵攻しようと?」

「そうだね。だって、自分がいないときに他国に攻められたら滅ぶでしょ。だから統一しておけば憂えることはないし。でも、そこまで至るまでは誰も至っていないってこと。」

だからさ、と彼は続ける。

「今回の貴女には、本当に驚かされたよ。

色つきに気付かることなく階移動をした君には」

しみじみと呟く彼には悪いが、私はそんなこと望んでいない。  
私が欲しかったのは平穏で、奪われることのない生活。

「世界が同じといふならば、どうして階層の違う者たちはお互いを認識できないの？」

「してゐた。僕の国を超えた先には、新たな大陸がある」とをお互い知つてゐるよ。知らないのは、月竜国だけ」

月竜国だけ？

私の国が知つてはいけない理由など、あるのだろうか。だから私の教育には一切出てきていないと？

それが、特殊な立場の者しか知らない。どちらかだらう。

「正解。ぼくら魔王しか知らないんだよ。

本来は、魔王の引き継ぎ…もしくは、他国の魔王から知られるんだ。

これは人間側も同じで、『王』のみが知つてゐるんだ。・・・・・  
まあ、僕らにとつてみればいい迷惑だよ」

たしかに、門番の役割を持つ彼からしてみれば、煩わしいことだろ。ただでさえ領地経営といつ仕事があるのに、これ以上仕事を増やすなど苦々しいものだらう。

だとすれば何故、門番である彼がその立場を放棄してまで侵攻へ踏み切るような状況を、人間は作れたんだ？

……いや、むしろ何故色持ちである国は門番の役割を担わされて  
いるの？

考えることは沢山ある。

だが、田の前の彼はそれを許してくれないよつだ。

「じゃあ月竜国魔王陛下、選択を聞かせてください」

彼は促す。

この世界の善悪を知らない私に、どうしきとこつのだ。  
結局は、貴方も彼ら人間と変わりない。

これは失望？

少し考えたが違う。

ああ、諦めか。

だから私は、こたえるよ。

「じめんね」

「私はまだ子供なの。

賢く生きれないし、最善を選ぶ術すら知らない」

損をする性格だと言われた。

確かにもつと賢く生きられたら、人生は楽だつたろう。

でも嫌だつた。どうして自分を殺してまで楽な人生を歩く必要があるのかわからない。

私は、我儘だ。

だから、『ごめん。

あなたには応えられない

「だからこそ『絶対』を持つてる」

これは私のプライド。

「『自分の選択を後悔しない』って」

昔、教えてくれた人がいた。

傷つけられて、悲劇のヒロインぶつて我儘になつていた私にガツンと言つてくれた人。私が出会つた中で最高の教育者だつた。

その人に会えるような選択をした自分は、きっと幸運だつた。それまで辛かつた。でもそれは、その人と出会い、向き合えるきっかけになつたんだと思う。

禍は転じて福となるんだよ。

だから、私は自分の選択を後悔しない。

ねえ、教えてよ。

「貴方が愛した人と出会ったのは、人間を憎むためだけ？」

人間を呪つたのは、彼女を愛したからでしょう？

「私はまだ、身を切られるほどに愛した人を他者の介入で失つたことなんてないよ。  
でも、もし私が貴方のよ<sup>う</sup>な立場になつても、貴方のようには行動できない」

それは私が貴方ではないから。そう言われても否定できない。

「仇をとることは、悪いことじゃないよ」

私が貴方の立場でもきつと、同じことをしたと思う。  
大人になりきれない私は、自分本位でしか考えられない。だから、自分を律することなんてできない。大切な人を傷つけられて、行動しないなんてできない。

私にあなたを非難する資格はない。

でもね、私は思うんだ。

「だけど、人間への復讐なんかに人生をかけていいの？」

人間はしぶとい。  
はつきり言つて、すべてを殺すなんてどれだけの時間がかかるのか。

「私だったら、その時間を全て恋人のために使つよ

愛する人を、いつまでも血の中に留させたくない。せめて記憶の存在は綺麗なところにいてほしい。辛いことなど忘れてほしい。

これもきっと、我儘なんだ。

私が彼女だつたらと考える。置き換えてみて、初めて考えが浮かんだ。

ああ、彼女もきっとこう思つてこる。

「だからどうか、お願ひ。」

「『その手を汚さないで』」

私は彼女を知らない。

誰よりも清らかな少女だつたと彼は言った。それだけの情報しかない。

私が彼女だつたら、きっとこんなことは望まない。

偽善だと言われようと、最後まで彼の中では綺麗なまままでいたい。

復讐してくれるほど愛されてるって実感できてうれしいけど、で

も最後まで彼の中では『心優しい』と思われていたい。

私は彼女が羨ましい。

だって、心から愛してくれる人がいるのだもの

でも、馬鹿な少女だと思う。

愛する人をここまで苦しめて逝くなんて。

仕方なかつたと言わればそれまでだけど、でもこんな結  
末<sup>まい</sup>は認められない。

やつぱり私は我儘だ。

『月の狭間で微睡む竜が抱きし國の管理者が願う』

『へ選択へに応えよ』

「私は、認めない」

## 魔王様つまづち魔王＆勇者ぱーていー つー（後書き）

投げやり感が漂つてて申し訳ないです。

今回は、後半だけが出来上がりまして、前半は楽にかけました。  
しかし、この二つを繋げるのにもすこしく苦労しまして・・・  
なんだか言い訳がましくて済みません。

次回からはコメディ成分多めで頑張ります。若鷹さんがやらかすと  
コメディになるようです。今回判りました。しかしラブコメにはな  
らない安心設計です。（え

書き直すべきなんでしょうが、そんな気力と筆力がないので、次回  
にその気力を回します

こんな小説をお気に入りしてくださっている方には申し訳ありません  
が、許してください。

みつしまぐ魔王様　　円鏡国では（前書き）

番外編とかは使いたくありませんでした  
そんな話です。

# みつしんぐ魔王様

## 月竜国では

月竜国執務室

「煩いよキー フア」

「うーうー」と蠢き叫ぶスライムに、大蛇の渾身の一撃が与えられる。人型ｖｅｒでの描写では、長髪をふり乱した美形がボォンキユツボン！の美女に回し蹴りされている。

男のほうは若干艶の薄れた銀髪から覗く隈が痛々しいが、それでも軽く美を超越した美貌は損なわれていない。むしろ触ればもろく崩れ去つてしまいそうな、纖細な美しさを与えている。決して乱暴などしてはならないような神々しさ……美形というのは本当に得である。それにも関わらず、手加減なしでドレスのスリットから覗くその美脚で沈める美女……特殊な趣味を持つ者にとってみれば是非変わつてもらいたい状況にある。繰り返すが脚フェチなら祟めたくなるほどの美脚だ。

そういうわけであるために、彼女のその行為を指てくれえて見守る男共が現在、多数存在する。

美男美女のやり取りは見る者に眼福を与えるが、これから記述はあえて魔王様描写風に綴らせていただく。ただの美形わんさかを求めるならば、この小説はお勧めできないのがよくわかつてしまう。ええ、作者自身も美形描写に飢えているこの状況でのこの行為。登場人物が主人公を除きほぼ美形であるというのに、決して美形描写

がないのは美形好きに喧嘩を売っているとしか思われない。ちなみに作者は美形が好きだ。主に観賞用的な意味で。

月竜国では、連日連夜…とはいってもこの三日間であるが、國中がパニックに陥っている。

何故か。

それは現在、月竜国の魔王が姿を消してしまったからである。ゅえに國力を上げて、田下搜索中（探索中）である。・・・・・が、見当たらない。

他国の協力を仰ぎ（強制ともいう）探索の手を広めるが、やはり見つからない。この世界のどこにも月竜国の魔王の痕跡がつかめないのである。魔王が一人でも欠けるということは、世界が成り立たないことと同意義があるので、国レベルでなく世界レベルで一大事だ。

けつして自分から「魔王になります」なんて言つたわけでもなく、周囲に泣き落としされても脅されても拒否り、仕舞には嵌められて魔王になつた彼女であつても、魔王であることには変わりない。最初の方の「しかたないか」という魔王様のセリフは、かつての自分の所業を忘れ去つた結果にある。まあ、脅されたことには変わりないが。

ちなみにその嵌め方といえば、宅配便の受け取りの際、婚姻届にすり替えちゃいましたと言つよくなレベル…。印を押す書類を取り換えたのだ。騙される方が悪いが、まあ魔王様の場合は自業自得だ。

「危ないですねえ。私じゃなければお陀仏でしたよ」  
大蛇からのしっぽビンタをくらいながらも無傷でプルンプルンと震えるスライム。ゲル状のスライムはのほほーんと抗議した。

「この規格外が……！」

盛大な舌打ちをする大蛇に全く恐れを抱かないスライム……スライムって、直接攻撃に強かつたつけ？

「お前ら、イライラするのもわかるが、執務室で暴れるなよ……」

テディは一人に抗議する。重要な書類とかあるんだから。もし破れたり失くしたりしたらテメエらが書き直すのか？ああ”？と いうオーラを纏うぬいぐるみに、二匹はしぶしぶ従う。

「で、何の手がかりも見つからないのか？」

「手がかり……ってことでもないけど、私の剣が持ち出されたっぽいのよね」

「剣……つづつうと、あのレイピアか？」

「ええ。あのよ」

大蛇と蛇が含みを持たせて会話する。それを横目にスライムはうぞうぞと魔王様のいないこの状況を嘆ぐ。

「剣なんかが魔王様の手掛かりになるものですか。・・・・・あ  
あ、  
御勞しや魔王様」

「あのね、一応あの剣は私の血筋か魔王しか使えない代物なの。これに該当しない者は触れただけで肉が腐り落ちるのよ。」

「ということは」

「ええ、魔王様は人間の境界にいる。  
しかも最悪なことに、狂った血の集う国よ。」

執務室に沈黙が落ちる。

人間の境界と言えば、決して超えてはならないという盟約がある。越えられるのは魔王のみであり、一介の配下が超えた次点で死、あるのみだ。

そして、『狂った血の集う国』とは、かつて大蛇が巫女として存在させられていた国であり、どの世代にも必ず一人は狂う者が王家に生まれる。まるで示し合わせたように破滅と再生を繰り返し、愚の踊る饗宴は開き続ける。狂った者が国を傾け、また別の狂った者が国を戻す。狂う者しか国を統治できない、そんな呪われた血筋。魔王である彼女が居られるような国ではない。きっと、早く助けねば彼女まで狂ってしまうだろう。大蛇はそう確信を抱いていた。

階渡りをするのを無言で匂わせた大蛇に、スライムは推測を一つ呈する。

「しかし、貴方の血筋でも扱えるといつのなら、彼女以外の者であるやもしませんよ」  
「そうだとしても、私の血を受け継ぐ者があるのよ。<sup>魔王</sup>この世界につても有益じやない」  
「だが、彼女の存在価値と比べれば取るに足らない」  
「そうだけど、」

大蛇が更に反論しようとした時、無機質な音声が流れた。

『←選択を受諾→』

三人に緊張が走る。

「受諾？」

これは月竜国の魔王のみが行える術。

「ナディアス、どこで行われた？」

「……アリーの推測通りですね」

「ああ、もうやつぱりあの子つたら…」

怒りを隠しきれない大蛇は尾を床に打ち付け、低く鳴った。そしてスライムに向き合ひ。

「私はこの国から動けない。だから、キーファが行つてちょうだい」「わかりました。それまで保たせてください」

その返事とともに大蛇の展開した式に組み込まれ、姿を消す。

「絶対、帰つてきなさいね」

大蛇が震える声で激励を飛ばした。

その姿を悲しそうに見るぬいぐるみは、呟く。

「俺、この意味なくね？」

「団長、気を落とさないでくださいー！」

「やつですよ。団長は肉弾戦中心なんですからー！」

周りの団長を励ます言葉が途切れることはなかった。

みつしまべ魔王様　丹竜国では（後書き）

こんなんで許してください

今度の件じやに泣きそつです。

ホームページでマックスホームページいつもお仕事を作ってしまったり、いろいろありました。

これについて今度詳しく語ります。では

## 「おなんじゅる魔王様（前書き）

お久しぶりです。

今回は外側の話です。最初から最後まで「コメティイ」です。

## 「つむんてつむ魔王様

ジョームズの苦惱、黒ドームの外側では

魔王同士が語り合っているその外側では、待機組が破壊行動に勤しんでいた。

彼らの眼前に浮かび上がった黒い空間は、彼らの渾身の攻撃にも耐えている。某有名な灰被りの少女並に無言で耐え続けている。憎き黒ドームをラキアスは血走った目で睨みすえる。

「私ですら勇者様と一人つきりになつたことがないところに……！」

「何言つてやがるんですか」

ラキアスの言葉にジョームズは適切な言葉を返す。

先ほど魔王が展開した術式により勇者と遮断されてしまったラキアスは落ち着きが失せていた。その苛つきは今や嫉妬へと変貌しつつある。

魔王と勇者の恋愛物語、なんて巷の御嬢さんにもてはやされるお題であろうつか。人外レベルの超美形と、片や美形とは言えない少女の身分差・種族差を超えた純愛ストーリー

一目見て惹かれあう男女。しかし勇者と魔王というお互いの宿命からは逃れられない……愛した相手が死ななければならぬといふのなら、せめて私に手をかけさせて……。勇者∨e∨、魔王∨e∨、同時発売中、とかね。勇者を密かに愛する騎士……とか作中に出てたら尚良し。

……ああ、今この状況で血走った眼をした上司がいなければ  
すぐにも書店に並びたい。

ジョームズはつらつらと現実逃避をした。だつて団長怖い。普段  
無表情な分、余計に怖い。

「うーむ、火精靈の炎でも焼ききれんとはのう」

「焼いちやダメでしょ？！勇者様」と丸焼きになりますから！」

クルトの言葉にジョームズは適切な言葉を返す。

彼は先ほどから黒ドームを召喚獣たちの手を借りてどうにかしようと  
していたが、いつの間にか手段を選ばないようになっていた。  
火精靈は召喚獣のレベルですらない。

白に近い巫女服の正装を身に纏う彼は、小首をかしげた。……可  
愛いよ、可愛いんだけど、やつていることがえげつない。火精靈の  
火なんて、一秒の燃焼で町が一個滅びる火力ですよね。というか何  
故呼び出せたし。

こんなことを言つてはいけないのは判つているが、黒ドーム頑張  
つてくれ…。勇者様を守ってくれ。

「ならドラゴンブレスしてみよつか？」

「ドラゴンブレスは猛毒成分が含まれているでしょうが…………  
いくらあなたに効かなかろうが、ここには凡人もいることを忘れな  
いでください！」

朗らかな王子の提案にジェームズは常識を持てと叫ぶ。

先ほどから王子の笑顔が甚だしい。悪巧みします、な悪役顔だ。ゆえにジェームズは彼を一番警戒していた。実は、王子は国において最重要危険人物のひとりであったのだ。ちなみにラキアスとクルトもそれに含まれている。危険人物故に、この三人は常に監視対象だ。ジェームズは今現在、実質一人でこの三人の監視役をしているのだ。ついでにツッコミ役も兼任している。

普段はお付の者たちでさりげなく監視も兼任しているというのに、只今の状況は如何に。特別手当を貰わなくてはやつてられない。実際に不憫だ。

そんな彼は、ふと先ほどの会話を思い出した。

(・・・・・・・・・・・・あれ、今ドラゴンブレスとか言った奴いたよね。

ドラゴンブレスって、人の口から吐けるものなの? )

### ドラゴンブレス

種族名・ドラゴンの攻撃手段の一つ。そのドラゴンの族(日、水、土、風、光、闇など)に応じたブレス。(例・水龍 水属性のドラゴンブレス)。下位ドラゴンでも、そのブレスには猛毒が含まれている。

どう考へても人間の口から放出されるものではない。

「・・・・・吐けるんですか?」  
「なんかできちゃった」

(とても軽いノリですねありがとうございます、もつ嫌だこの国の王族問題兎ばつかり普通の王族に仕えたい。)

ジョームズは転職を考えた。

＜選択を受諾＞

「今何か聞こえた？」

王子の言葉に緊張が走る。

「この中で何かがあつたのでしょうか。勇者の身に何か・・・・？」  
クルトの言葉にラキアスは表情を失い、ふらりと黒ドームに近づく。

依然としてその形状を保つていてる保護壁に、彼がおもむろに触れようとしたとき……

ぱあ・・・ん

背後で転送魔法特有の術式が広げられた。

四人は緊張しつつも各々の武器を構えなおす。ラキアスはその場

から離れ、持ち場に着く。

緊張で張りつめた中、中心にいる人物が声を発した。

「ここですか」

うつすらと輝く陣の内から、その光を反射する銀色の髪を持つ男が現れた。四人はまぶしさにうつすらと目を細める。

銀色の男は腰まで届く長い髪を下の方でくくつており、この世界ではついぞ見たことがない髪留めをしていた。更に驚くのは、その美貌であつた。ラキアスに慣れていた彼ら三人であつても、系統の違う美形であるため、魔王の時と同様に目が逸らせない。

侵入者は4人の視線を浴びながらも気にせず、凍りつくような水面の色を有した瞳を室内に巡らす。

「エンジエ？」

「まさか！ エンジエは紫色の眼のはず……」

「どちらにせよ、あの美貌は人間ではないだろ？……」

「誰だ」

混乱に陥った三人は総スルーで、人間でありつつも人外レベルのご尊顔をお持ちなラキアスは侵入者に問い合わせる。

（敵ならば切り捨てるまで）

愛用の剣を握り直し、ラキアスは男と対峙する。

しかし侵入者は不可解なものを見るように視線を彼らに向かた。

「貴方たちこそ何者ですか？私は忙しいのですから、邪魔するのであれば去ってください。」

「目的は？」

「それを言ひ必要があると？」

ラキアスの問いにも視線を合わせようともせずに、室内を見回していた男はふと黒ドームに目を留め、微笑んだ。

「いけない人だ。こんなにも私を振り回す」

「ハハハと騒ぐ間に、ジェームズは

(やばい、勇者様逃げろ!)

本能からの警告だろうか。何故か勇者である彼女に警告を飛ばしてくなつた。本当に何故だらう。

笑いを収めた男がドームに近づいたところで、ラキアスがそれを阻止しようとする。

# 「彼女の関係者か？」

「彼女？たかが人間があの方を『彼女』呼ばわりですか。」

嘲笑する男に、ラキアスはさらに表情をそぎ落とす。

「彼女の関係者かと聞いているんだ」

「ええ、勿論ですよ。の方は私の大切な方、…………私はの方のためならば、いかなることも致しましょ。」

「の方の幸せじゃ、私の喜び…」

侵入者は素敵な笑顔で宣言した。

（あつれー、どつかできいたセリフだなあ）

ジーモーズは遠い目をする。ふふ、つい最近自分の上司から聞いたような気がする。デジャヴ率はんぱねえ。

「そりゃ、だが、の方を想う気持ちは負けん！」

「はつ、まつと出の青二才が私に敵うわけがないでしょー。」

わーお、低俗な争い。

もしかして魔王と勇者の恋物語じゃなくて、勇者と騎士と謎の男（勇者と知り合い）の三角関係だったのだろうか。それは意外性を求める巷の乙女に入気でしうがね。

ジーモーズは再び現実逃避をした。

「つと、こんなことをしている場合ではありませんね。」

侵入者の男は、ラキアスと睨みあつていた状況をあっさりと打消し、ドームへとまっすぐに歩いて行つた。そして触れるが、やはりドームは沈黙したままだ。

「さつきからそれのせいで勇者様に会えない」

「勇者？……ああ、あの方ね」

侵入者は変な顔をした。しかし美形とは得である。そんな顔をしても美形には変わりない。

・・・・・・・・・あはは、ビケ  
イハホロべ。

ドームが溶解した。

。」

「兄上は溶解系？」

王子は真顔で呟いた。

## 「おもんてつと魔王様（後書き）

ビケイハ～は、カワウソのセリフです

今回はどうだけ美形描写を使わなかに尽力しました。

あ、侵入者はもちろんスライムの彼です。

ナディイ登場は美形描写を最初の方だけしましたが、それ以降は頑張つて削りました

個人的に若鷹が沢山活躍できてうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7150p/>

---

魔王様みーつ人外

2011年12月17日19時46分発行